

以下については、公開対象から除いています。

五四〇六三頁

VI 自然科学的分析

試料

花粉分析

珪藻分析

総合考察

図版二四

埼玉古墳群発掘調査報告書 第三集

愛宕山古墳

埼玉県教育委員会

序

埼玉県は、全国に先がけて、史跡「埼玉古墳群」の広域保存と環境整備を図る目的で、さきたま風土記の丘の建設計画を立てました。

埼玉県教育委員会では、この計画にもとづき、昭和四十三年の稻荷山古墳にはじまる継続的な発掘調査を実施し、その成果にもとづいた環境整備を促進する一方、昭和四十四年にはさきたま資料館を開館し、資料の収藏・展示の充実に鋭意努力してまいりました。

本書で報告する愛宕山古墳は、全長約五十三㍍の前方後円墳であり、昭和五十六年度に周堀部分の発掘調査を実施いたしました。その結果、周堀の形態が稻荷山古墳や鉄砲山古墳と同様の長方形にめぐる二重堀であることが判明したほか、堀の中から貴重な埴輪が多数出土いたしました。

本書は、埼玉古墳群の稻荷山古墳、鉄砲山古墳に次ぐ、埼玉古墳群発掘調査報告書第三集であります。埼玉古墳群に関する基礎資料として広く御活用いただき、教育、学術、文化の振興に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行に至るまで多大の御指導・御協力を賜りました文化庁をはじめとする関係各機関並びに関係者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和六十年三月

埼玉県教育委員会教育長

長井五郎

目 次

<p>I 序 　　例言 　　調査の組織</p> <p>II 調査の経過</p> <p>III 遺跡の立地と環境</p> <p>IV 調査の成果</p> <p>　　一 遺構 　　(+) 前方部南側調査区 　　(+) 後円部東側調査区</p> <p>　　二 遺物 　　(+) 墓輪 　　(+) 土師器及び須恵器</p>	<p>V まとめ</p> <p>VI 自然科学的分析</p> <p>　　一 試料 　　二 花粉分析 　　(+) 分析方法 　　(+) 分析結果 　　三 珊瑚分析 　　(+) 分析方法 　　(+) 分析結果 　　四 総合考察</p>
<p>18 15 15 12 8 6 6 3 2 2 1 1 1</p>	<p>59 57 56 56 56 54 54 54 54 54 54 51</p>

挿図目次

表 目 次

	第1表 主要な円筒埴輪の計測値	第2表 出土遺物観察表1	第3表	第4表	第5表	第21図	第22図	第23図	第24図	後内部東側調査区出土遺物実測図	1 (89- 91)	13 (77- 88)	12 (65- 64)	11 (49- 64)											
4	2	3	4	45	44	43	42	18	64	64	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
9	187	191	193	197	199	170	154	139	125	115	109	94	108	114	93
8	192	192	200	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
7	197	197	200	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
6	198	198	200	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
5	199	199	200	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
4	200	200	200	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
3	193	193	193	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
2	194	194	194	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
1	195	195	195	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
0	196	196	196	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-1	197	197	197	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-2	198	198	198	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-3	199	199	199	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-4	200	200	200	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-5	191	191	191	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-6	192	192	192	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-7	193	193	193	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-8	194	194	194	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-9	195	195	195	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-10	196	196	196	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-11	197	197	197	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-12	198	198	198	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-13	199	199	199	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-14	200	200	200	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-15	187	187	187	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-16	188	188	188	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-17	189	189	189	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-18	190	190	190	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-19	191	191	191	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-20	192	192	192	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-21	193	193	193	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-22	194	194	194	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-23	195	195	195	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-24	196	196	196	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-25	197	197	197	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-26	198	198	198	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-27	199	199	199	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-28	200	200	200	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-29	187	187	187	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-30	188	188	188	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-31	189	189	189	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-32	190	190	190	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-33	191	191	191	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-34	192	192	192	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	
-35	193	193	193	186	169	153	138	124	114	109	94	108	114	93	

第6表 ク 5

第7表 ク 6

第8表 ク 7

第9表 ク 8

第10表 ク 9

第11表 試料表 ク 10

第12表 花粉分析結果一覧 ク 11

第13表 珪藻分析結果一覧 ク 12

図版目次

後円部東側調査区全景

前方部南側調査区出土遺物 1 (1)

前方部南側調査区出土遺物 2 (2)

前方部南側調査区出土遺物 3 (3)

前方部南側調査区出土遺物 4 (4)

前方部南側調査区出土遺物 5 (5)

前方部南側調査区出土遺物 6 (6)

前方部南側調査区出土遺物 7 (7)

前方部南側調査区出土遺物 8 (8)

前方部南側調査区出土遺物 9 (9)

前方部南側調査区出土遺物 10 (10)

前方部南側調査区出土遺物 11 (11)

前方部南側調査区出土遺物 12 (12)

前方部南側調査区出土遺物 13 (13)

前方部南側調査区出土遺物 14 (14)

前方部南側調査区出土遺物 15 (15)

前方部南側調査区出土遺物 16 (16)

前方部南側調査区出土遺物 17 (17)

前方部南側調査区出土遺物 18 (18)

前方部南側調査区出土遺物 19 (19)

前方部南側調査区出土遺物 20 (20)

前方部南側調査区出土遺物 21 (21)

前方部南側調査区出土遺物 22 (22)

前方部南側調査区出土遺物 23 (23)

前方部南側調査区出土遺物 24 (24)

前方部南側調査区出土遺物 25 (25)

図版一〇

1

ク

図版一一

2

ク

図版一二

1

ク

図版一三

2

ク

図版一四

1

ク

図版一五

2

ク

図版一六

1

ク

図版一七

2

ク

図版一八

1

ク

図版一九

2

ク

図版二〇

1

ク

図版二一

2

ク

図版二二

1

ク

図版二三

2

ク

図版二四

1

ク

図版二五

2

ク

図版二六

1

ク

図版二七

2

ク

19
(52)
75

18
(45)
51

17
(29)
44

16
(20)
28

15
(15)
19

14
(14)
13

13
(13)
12

12
(12)
10

11
(10)
11

10
(11)
11

9
(9)
8

8
(8)
7

7
(7)
6

6
(6)
5

5
(5)
4

4
(4)
3

3
(3)
2

2
(2)
2

例 言

一本書は埼玉県行田市^{さなだ}玉五二〇六、他に所在する愛宕山古墳周囲の発掘調査報告書である。

二 発掘調査は昭和五六年度に、整理は昭和五九年度に、文化庁国庫補助事業として実施した。

発掘調査期間 昭和五六六年七月一日～昭和五六六年九月三〇日

(担当者) 梅沢 太久夫、今泉 泰之、中島 宏

三 各事業の組織は別表に掲げるとおりである。

四 出土品の整理及び本書の挿図、図版作成は主に杉崎茂樹が当り、小久保微、中島 宏の協力を得た。

五 本書の執筆は各文末に記したとおり行つたが、全体について横川好富が加除筆を行つた。

六 写真撮影は、遺構については各担当者が、出土遺物については杉崎 茂樹が行つた。

七 遺構の名称を、挿図中では以下のように略して表示した。

S A : 内堀、S B : 中堤、S C : 外堀、S D : 溝、S E : 井戸、S H : 土壙
八 花粉、孢子及び珪藻分析は(株) バリノ・サーべイに、発掘調査区内の基準点及び水準点の設定は(株) 中央航業に委託したものである。

九 発掘調査から整理、報告に至るまで、左記の方々及び各機関から御指導、御協力を賜わった。

		発掘調査			
青代 清一	秋山 時三	岩崎 いく	太田 博之	大野 かく	
大野 源一	大野 鶴枝	大野 りん	大野 りん	加相 なか	
川崎 なつ	菊地 きん	木村 あさ	鴻野 淳	川崎 喜久男	
小林 志乃	小林 仁一	島崎しづ子	島田とし子	小林 計治	
関 義則	関口 よし	田島 幸枝	野口 ふみ	柴崎 まつ	
山崎美栄子				萩原 太郎	
整理・報告		河辺美津江	掛川智恵子	木村 俊彦	小島 清一
太田 博之	坂本 孝則	白井 照子	島田 益江	鈴木須美江	
坂本 和重	多田 健二	浜中 紀子	橋本 一江	三田 あけみ	
関口 広子					
市毛 熱	井上 裕一	岩崎 卓也	大塚 初重	金子 真士	
金子 正之	龟井 正道	車崎 正彦	斎藤 国夫	塙野 博	
田中 一郎	田部井 功	寺社下 博	中島 利治	増田 逸朗	
柳田 敏司	山崎 武	吉川 国男	若松 良一		
行田市教育委員会	行田市遺跡調査会				
鴻巣市教育委員会					
熊谷市教育委員会					

調査の組織

主体者 埼玉県教育委員会

事務局（発掘調査・整理） 埼玉県立さきたま資料館

事務局（企画・調整）	埼玉県教育局文化財保護課	館長 鈴木太一（昭和五六年度）
教育長	井五郎（昭和五九年度）	副館長 兼 坂巻正一（昭和五九年度）
教育次長	沼尻和也（昭和五六年度）	庶務課長 兼 兼 岩上進（昭和五九年度）
同	岩上進（昭和五九年度）	庶務課長 兼 兼 金井塙良一（昭和五九年度）
課長	野村鍋一（昭和五六年度）	庶務課長 兼 兼 木戸一（昭和五九年度）
民俗文化財係長	木戸一（昭和五九年度）	庶務課長 兼 兼 町田勝義（昭和五六、五九年度）
記念文化財係長	町田勝義（昭和五六、五九年度）	庶務係長 橋本克己（昭和五六年度）
課長補佐	早川智明（昭和五九年度）	同 鈴木春美（昭和五六年度）
兼庶務係長	早川智明（昭和五九年度）	同 鈴木廣子（昭和五九年度）
課長補佐	畔上敦志（昭和五六年度）	川崎栄一（昭和五六、五九年度）
庶務係	柚木博（昭和五六、五九年度）	学芸課長 小川良祐（昭和五六年度）
同	龟田孝（昭和五九年度）	同 小久保徹（昭和五九年度）
埋蔵文化財長	栗原文藏（昭和五六年度）	芸員 今泉泰之（昭和五六年度）
同	梅沢太久夫（昭和五九年度）	同 中島宏（昭和五六、五九年度）
文化財係	井上尚明（昭和五六年度）	杉崎茂樹（昭和五九年度）
同	杉崎茂樹（昭和五六年度）	同 大熊達雄（昭和五六、五九年度）
同	宮崎朝雄（昭和五九年度）	同
同	鈴木秀雄（昭和五九年度）	同

I 調査に至る経過

埼玉古墳群は昭和一三年八月八日付文部省告示をもつて国の指定史跡になっているが、周辺地域を含めて発掘調査が行なわれたのは最近のことである。それまでは遺物の出土は知られているがその状況が不明なものがほとんどである。昭和四〇年に文化庁の前身である文化財保護委員会では、考古、民俗、古文書等の文化財を、その地域の特色ある風土と一体化して保存と活用をはかるための「風土記の丘」建設構想が発表され、それをうけて埼玉県では昭和四二年に埼玉古墳群を中心とした「さきたま風土記の丘」建設事業が開始された。そして同年二月に二子山古墳周囲復原のための事前調査が始まり、以後昭和四九年度までは主として周囲復原工事のためのトレンチ発掘による確認調査が実施されて、二子山、稻荷山、丸墓山、奥の山の各古墳の周囲が

復原されている。稻荷山古墳については昭和四三年に主体部の調査が行なわれて報告書も刊行されている。昭和五五年度から国庫補助事業として埼玉古墳群の発掘調査および出土遺物の整理が毎年実施され現在に至っている。これは史跡整備に先行して各古墳の堀や墳丘の範囲を確認するものである。本書に報告する愛宕山古墳については周囲規模を確認するために、昭和五六年度の調査区域として後円部東側と前方部南側を選定し、昭和五六年七月一日から発掘調査を開始した。なお愛宕山古墳東側の市道改良に伴い、行田市遺跡調査会が同年一〇月一三日から一月七日まで発掘調査を実施しており、その成果の一端についても本書に取録している。

(小久保 徹)

II 調査の経過

一 前方部南側調査区（西半部分）

昭和五六年七月一日

前方部南側周囲の発掘調査開始。排土場所の都合で西半と東半に分け、西半から着手。客土及び表土を約二〇センチの深さで重機で除去し、確認作業を開始。

七月六日（一〇日）

ローム層上面（深さ約七〇センチ）まで掘り下げ周囲の確認作業をすすめる。調査区内をほぼ東西にのびる三本の堀を確認。墳丘側から堀A（内堀）、

B（SD004）、C（外堀）と仮称。堀Aは確認面で埴輪片が出土、コーン部も確認し周囲と判明。堀Bは堀Aを切ることを確認。堀Cは覆土上部から埴輪片が出土、堀Aとほぼ平行し外堀と考えられたが、南側へ湾曲する様相が窺え、別の古墳の周囲とも考えられた。

七月一三日（一七日）

造構確認作業を終え、堀Bを掘り下げ、調査にかかる。堀Aを壊しておらず、埴輪片の出土が目立つが、わずかに陶磁器片が混る。堀Cはプランがほぼ確定し、堀Aと平行するため、外堀である様相が強まつた。

七月二〇日～三一日

堀Bの調査を終了し、堀Aの調査にかかる。覆土は黒色土、黒褐色土が主体で、プランは比較的明瞭、ほぼ全域から埴輪が出土する。東辺の内側立上り部は擾乱のため不明。雷雨のある日が多く、調査区内の排水に苦慮する。

八月三日～七日

堀Aの調査継続。埴輪の出土状態の写真撮影、実測図作成。堀Cは覆土が内堀と同質のため外堀と判断。調査を進めた結果、外側の立上りは調査区内では検出できなかった。埴輪は内堀にくらべ少ない。

八月一〇日、一一日

外堀の調査を終了し、調査区全体の写真撮影を行う。

二 後円部東側調査区

八月一九日～二一日

調査区を後円部東側墳丘裾と市道の間に設定し、調査を開始した。現地はかつて宅地であったため、墳丘裾まで整地されており、一部は擾乱されている。表土を浅く重機で除去した後、内堀の確認作業にかかった。

八月二四日～二八日

造構確認作業をすこしめる。表土下七〇～八〇センチでローム層となる。調査区の北及び南に溝を確認し、南端で内堀の外側立上りを検出。内堀の墳丘側立上りは不明のため南壁の墳丘側に一×一・五筋のトレンチを設定。

八月三日～九月五日

内堀の調査を継続。埴輪は前方部ほど多くないが、東の部分では中堤側から落ち込んだ状態で、多量に密集して出土。内堀の墳丘側立上りを部分的に

確認。堀の底は調査区内では南から北に向い、また、東側から墳丘に向い浅くなる。埴輪の出土状態の写真撮影、実測図作成後取り上げ。

九月七日～一〇日

後円部北側に三・五×一・五筋のトレンチを設定。しかし溝(SD010)の延長部分が検出され、墳丘端部は明らかにできなかった。

調査区全体写真撮影、実測図を作成し、調査を終了する。

三 前方部南側調査区（東半部分）

九月一〇日、一一日

前方部南側調査区東半の調査を開始。重機により西半調査区の堆土を移し、表土、客土を除去し、周堀の確認作業にかかる。SD004の延長部分、内堀の東辺外側ライン、外堀の一部を確認。

九月一四日～一九日

外堀、内堀、SD004 調査。SD004 の北壁に平行して走る小溝は、西半調査区より深く安定している。外堀の東壁は平行してのびる溝(SD005)と重複する。調査区北東隅に土壤(SH004)を検出。内堀では多量の埴輪が出土したが、湧水が激しく出土状態の記録できず。

九月二四日～二五日

内堀、外堀の調査終了。外堀の東壁はSD005の覆土中にあることが判明。外堀底は調査区内中央がやや深く、コーナー部に向いやや浅くなる。

九月二八日、二九日

全体写真撮影、実測図作成し、調査を終了する。

II 遺跡の立地と環境

愛宕山古墳は埼玉県行田市埼玉に所在する埼玉古墳群に属する。現存する八基の前方後円墳の中では最も小さい。古墳の名称は墳頂に愛宕社が祀られていたことに由来する。現況は全長五三・〇尺、後円部径三〇・〇尺、同高さ三・三八尺、前方部幅四一・五尺、同高さ三・三尺、主軸の方向角は座標北一五七・〇度一東である。東側鞍部がやや削られ、西側の鞍部から前方部側面は約一尺土取りされて崖面になっている。愛宕山古墳は標高一八・一尺の埋没ローム台地（洪積高地）に立地している。埋没ローム台地は、台地が沈降して沖積層に覆われたもので埼玉県では利根川中流域の右岸の行田市周辺に多く認められるものである。

愛宕山古墳を含む埼玉古墳群の主体は大形前方後円墳八基、大形円墳一基が集中分布する地域である（第1図参照）。周囲の微地形については、市街化や農地の転換などが進行して観察しにくい部分もあるが、参謀本部測量局が明治一七年に測量し、作成した迅速測図（迅測図）「行田町」で当時の地形状況を知ることができる。これによると埼玉古墳群の周辺は、集落、畑地、山林、灌木地として示される微高地が広がっていることがよくわかる。

第1図で示すと埼玉古墳群のある富士山地区から白山、万願、秩父鉄道東行田駅から青条地区にかけて微高地が連続して広がっている。ここでは武藏水路にかかる長野神明遺跡が調査され和泉、鬼高の集落が確認されている。また東行田駅周辺では長野中学校校庭から織文時代前期（関山式）の多數の土器片や中期（加曾利E）の竪穴住居跡、古墳時代、平安時代の住居跡が検出されている。青条地区には水田下に没した古墳や、とよま古墳（全長六九

尺の前方後円墳）が発掘されている。埼玉古墳群南側は渡棚、利田に続くものと百塚、下埼玉、杉原地区へ続く微高地がある。下埼玉には若王子古墳群が立地するが、地形的には埼玉古墳群と同じ平坦地である。若王子古墳群東方に小針遺跡があり、古墳時代（鬼高期）及び平安時代の集落が検出されている。ここにはローム層がある。現在は水田化している地域もあるが迅測図では下埼玉から広田地区（川里村）にかけて松林、灌木、畠地が広がっている。したがって埼玉古墳群東方約五キロメートルにわたって広大な平坦地が広がっていたことになる。埼玉古墳群西方地域は奥の山古墳南側に小円墳や前方後円墳らしい大入塚があつたとされているが、迅測図でも確認できる。現在は水田地であるが、当時は畑で佐間地区へ延びている。一部水田地域があり、現在の忍川と武藏水路が接近する地域で狭い断続部があつた可能性もある。佐間地区には四基の古墳があり、大日塚古墳は箱式石棺の上に二基の粘土櫛が並置されている（註5）。佐間地区南側の桶上・下忍地区も微高地であり、鴻池、武良内、高畠遺跡から五領期の方形溝墓、五領、鬼高の住居跡、古墳跡が発見されている（註6）。

以上のように埼玉古墳群周辺は連続性の良い微高地があり、古墳や集落の分布地域になっている。若小玉古墳群、小見古墳群も同様の微高地に属する。しかし厚い沖積層下に没した古墳や集落跡も存在し、その後の沖積作用の激しさを示すが、生活面が現在よりもかなり低いこともあらわす。沖積面が低位であれば現在の微高地は相対的に高いことを示すので、当時の地形状況は現在とは大きく異なり、高低差の大きい地形であったと考えられる。

埼玉古墳群西側の低地は、南と北に微高地が続くので三方を囲まれた地形になり、北西→南東の基本傾斜をもち、そのふところが深い。佐間地区の狹

い断続部を認めても湛水地域であり、ここはかつては深度のある沼沢地であった可能性もある。埼玉古墳群北側の旧忍川は、丸墓山・稻荷山古墳の周囲を切斷しているので後世の開削と考えられる。埼玉古墳群東側一帯は広大な平坦地で、標高のやや低い小針遺跡で、鬼面期全般にわたる住居跡が狭い範囲から検出され、ローム層も確認されたことを考えると、当時の沖積面との比高差はかなり大きいと考えられる。住居跡の分布密度が濃く、大集落の可能性があろう。埼玉古墳群、若王子古墳の後背集落としての関係が問題となる。

埼玉古墳群の大形前方後円墳について、その方向が一定していること、主軸方向角、形態、規模に、いくつかのグループがあることが指摘されている。^(註8) 分布の特徴は、前方部方向を一定にして、狭い範囲に密集していることである。稻荷山古墳、二子山古墳、鉄砲山古墳の規模上位三古墳が北→南へ直列的に接して並んでいる。稻荷山古墳と二子山古墳との空間地は、両者の年代に近い小円墳群が調査され、分布状況に計画性のあることが報告されている。^(註9) 八〇~五〇年頃の前方後円墳は大形古墳直列分布の南端西側に北→南方に向う。地形特徴は北西方向は視界の開けた沼沢地、南東方向は台地状の広大な出土品、墳丘とともに新しい一群である。丸墓山古墳の占地は、地形的には低地寄りで地盤は良くない。これら二古墳は円墳であること、方向角が他の古墳と大きく異なるが、他に空間地をもちらがら密接しているのは、高度な計画性に基づくものであろう。このような配置の意味は明らかではないが、主軸方向角が北東→南西にそろっているのは、その側面観を重視することになる。地形特徴は北西方向は視界の開けた沼沢地、南東方向は台地状の広大な

平地であり、大集落跡の可能性が考えられる地である。対外的な要素と分布、造出しの位置等を考えれば北西方向が重視される。

(小久保 徹)

註1 塩野博「行田市長野神明遺跡」『考古学雑誌 第五五卷四号』昭和四四年
註2 「長野中学校校内遺跡」行田市文化財調査報告第一集 行田市教育委員会
註3 「斎条五号墳発掘調査報告」行田市文化財調査報告第一集 行田市教育委員会
註4 横田敏司、他「とやま古墳」昭和四四年

註5 柴田常思、他「埼玉村古墳群調査表」昭和一〇年
註6 「大日種子板石塔婆および古墳の調査」行田市文化財調査報告書第四集 行田市教育委員会 昭和五三年

註7 萩原文蔵、他「鴻池・武良内・高畠」埼玉県道路発掘調査報告書第一集
註8 榎本忠義「埼玉県教育委員会 昭和五一年
註9 ①「埼玉稻荷山古墳」埼玉県教育委員会 昭和五五年
②増田逸朗「辛亥銘鉄劍出土古墳の概要と埼玉古墳群」『考古学ジャーナル
一〇二号』昭和五七年
「天王山 榎塚古墳他周囲調査概要」『資料館報 No. 6』県立さきたま資料館
昭和五〇年



1	墳	野	明	遺	跡
2	墳	神	中	校	々庭
3	墳	星	宮	遺	跡
4	墳	守	里	地	区
5	墳	良			
6	墳				
7	墳				
8	墳				
9	墳				
10	墳				
11	墳	古	古	古	古
12	墳	古	古	古	古
13	墳	古	古	古	古
14	墳	古	古	古	古
15	墳	古	古	古	古
16	墳	古	古	古	古
17	墳	古	古	古	古
18	墳	古	古	古	古
19	墳	古	古	古	古
20	墳	古	古	古	古
21	墳	古	古	古	古
22	墳	古	古	古	古
23	墳	古	古	古	古
24	墳	古	古	古	古
25	墳	古	古	古	古
26	墳	古	古	古	古
27	墳	古	古	古	古
28	墳	古	古	古	古
29	墳	古	古	古	古
30	墳	古	古	古	古
31	長	野	明	遺	跡
32	長	野	中	校	々庭
33	星	神	宮	遺	跡
34	池	星	里	地	区

第1図 愛宕山古墳及びその周辺の遺跡

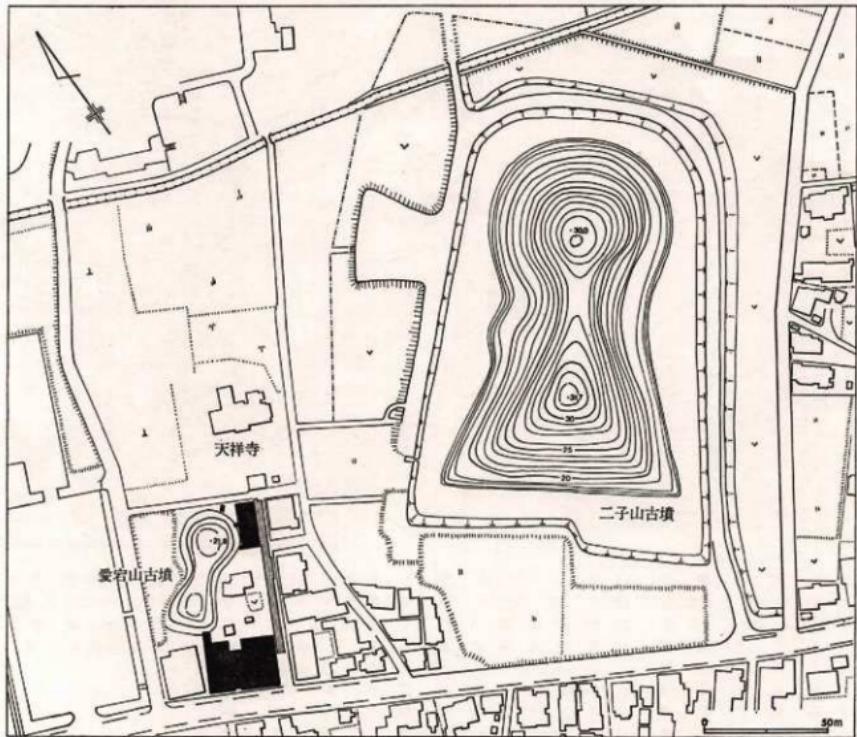
IV 調査の成果

一 遺構

愛宕山古墳の周堀範囲確認調査は前方部、後円部の二地区について実施した(第2、3図)。

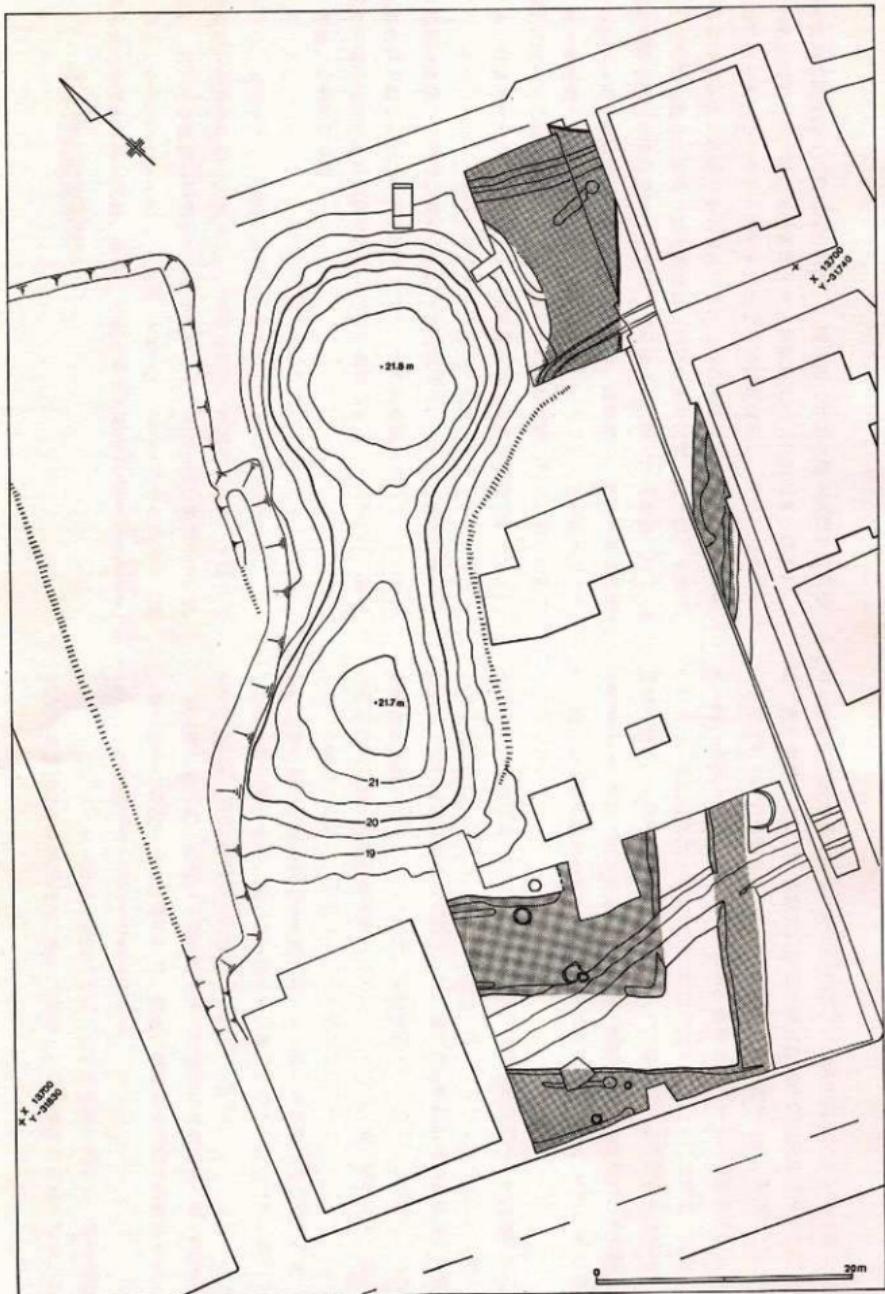
前方部調査区は周堀のコーナー部が想定される前方部南側、約五六〇メートル、後円部調査区は後円部の墳丘裾東側約一四〇メートルを対象とした。両調査区とも国有地で、かつては宅地であったが現在は整地されている。標高は一八八前後である。

前方部調査区では内堀、中堤、外堀を検出し、愛宕山古墳が二重の周堀をもつことが明らかになった。後円部調査区では内堀を検出した。また、昭和五六年一〇月、行田市遺跡調査会により両調査区の東側に隣接する道路敷地が改修工事に先立ち発掘調査され、内堀、中堤、外堀が検出されている(第2、3図)。この調査では後円部東側で、内堀の北辺の一部が検出され、愛宕山古墳の周堀の平面形が稲荷山古墳と同様に長方形であることが判明したほか、前方部調査区の結果とあわせて、内堀の全長がほぼ確定できるなど重要な成果が得られている。



■：埼玉県教育委員会調査区 ■：行田市遺跡調査会調査区

第2図 愛宕山古墳及び発掘調査区の位置 (1/2,000)



第3図 愛宕山古墳測量図及び各調査区の位置 (1/400)

(一) 前方部南側調査区

前方部南側調査区では内堀、中堤、外堀のほかに溝五(SD001-S005)井戸跡四(SE001-S004)、土壤四(SH001-S004)を検出した(第4図)、これらの遺構は重複するものを除き、ローム層上面で確認した。調査区西端での層序は客土、表土以下、暗茶褐色土、茶褐色土、ローム層となつてある。地表からローム層上面までの深さは六五~七〇cmである。

内堀、中堤及び外堀

内堀は前方部前面の堀底幅が約六・二尺、検出面で幅七・五~七・九尺、東側面は内側の立上がり部を擾乱しているため不明であるが、コーナー部での推定幅約七・五尺。深さは五~七〇cmで、コーナー部から東辺にかけて、ゆるやかに深くなる。前方部前面部分の内側ラインは、わずかにカーブする部分があるが、外側ライン、東側側面部分はほぼ直線的である。

覆土は調査区西壁の土層断面(第5図)では第四層黒褐色土、第五層黒色

土、第七層褐色土、第八層黄褐色土に分層され、さらにコーナー部ちかくの深まる部分では、堀底から二~三せん上がって、層厚約一・五~二せんの灰白色粘土層が約二せんの間層(第五層)をはさんで二層水平に堆積していた。この白色粘土層から採取した土層試料(C地点№6試料、第4図)の珪藻分析では好湿地棲の珪藻が多く検出され、「この試料は池沼・湿地の環境下での堆積物と考えられる」と報告されている(58頁参照)。また、白色粘土層の上層の黒色土(C地点№5試料)および褐褐色土(C地点№4試料)、調査区西壁の第四層(B地点№5試料)、第五層(B地点№4試料)の珪藻

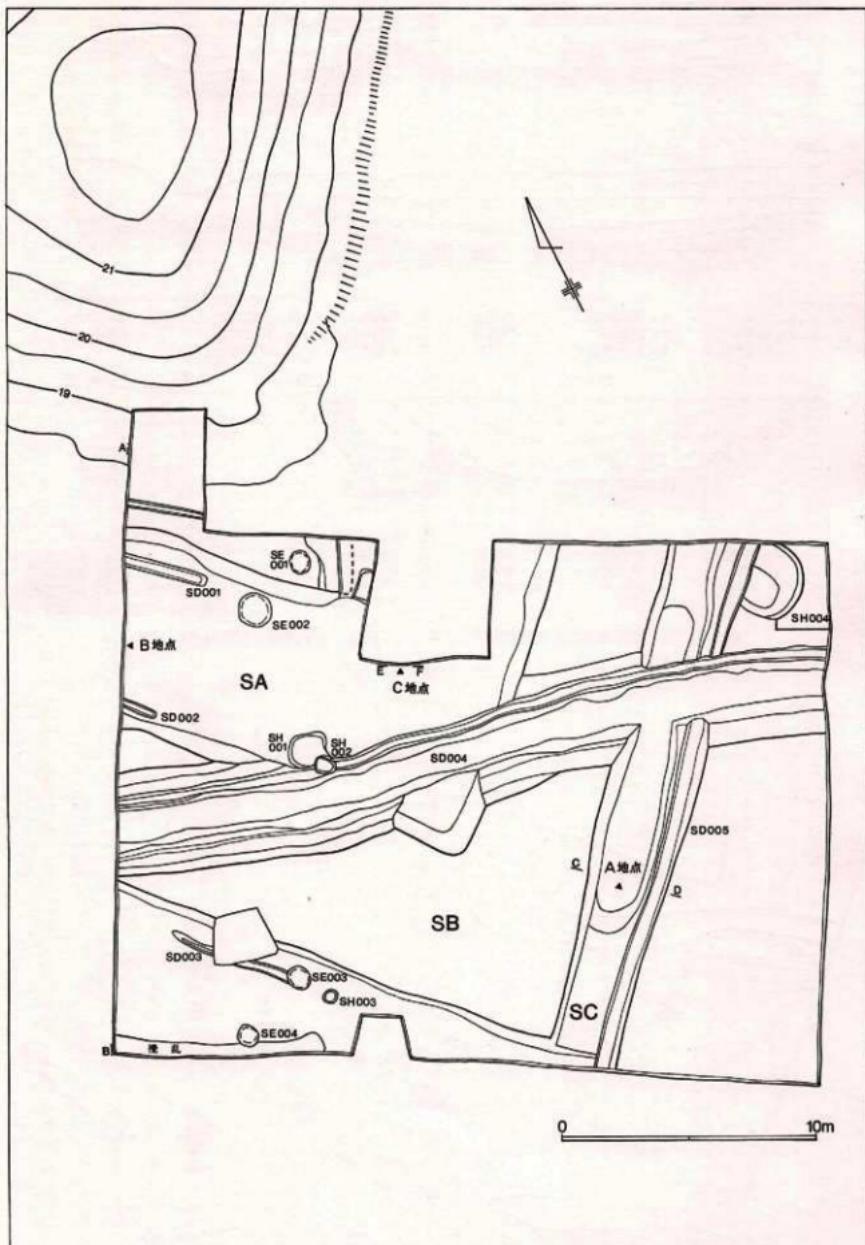
分析もほぼ同様の結果が出ている。したがって珪藻分析の結果からは、内堀なついた時期があつたことが考えられる。

第四層中には浅間TBが認められ、内堀の最終埋没時期が推測できる。南辺の西側で内、外側立上がり部ちかくに検出された二本の溝(SD001、002)の覆土は内堀と同じ第七層で、明らかに堀に伴う。

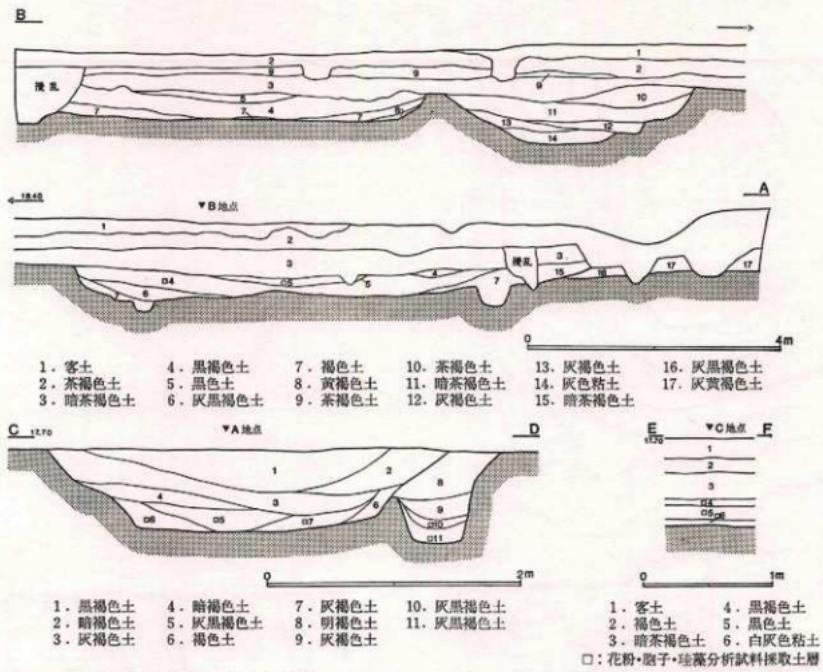
埴輪は第五層に多く、第三層下部および第四層からも出土した。覆土下層の一一部から東辺にかけて、中堤よりにやや密集している。

中堤の幅は前方部前面の基部で六・五~六・七尺、検出面で六・七尺、東側側面の基部で五・一~六・二尺、検出面四・〇~四・八尺である。この面に盛土された痕跡は認められなかった。検出面は平坦である。内堀の東側部分での埴輪の出土状況は、本来、中堤上に樹立されていたものが、内堀へ落ち込んだことを物語っているが、中堤上に埴輪の原位置を示す痕跡は認められなかつた。

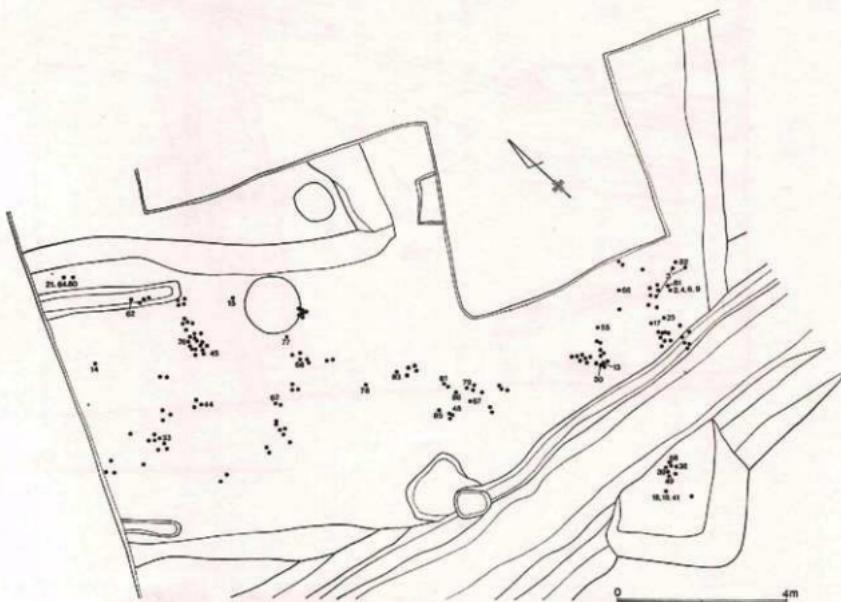
外堀は南辺の外側立上がり部が調査区内で検出されず、また、東辺は溝(SD004)に切られ、外側ラインは溝(SD005)と重複し、その覆土中にあるため、その幅を確定できなかつたが、南辺は東辺に倍する幅をもつようである。南辺は幅五・六尺以上、東辺は二・三~三・二尺前後。南側コーナー部で南辺と東辺のなす角度は83°で、内堀外側コーナーと外堀内側コーナーを結ぶラインは方位にそろう。南辺は内堀に平行するが、東辺はわずかに墳丘側に振れている。この傾向は行田市遺跡調査会調査区の成果と合わせると一層明らかで外堀は墳丘くびれ部に向い、弓なりにカーブする(第3図)



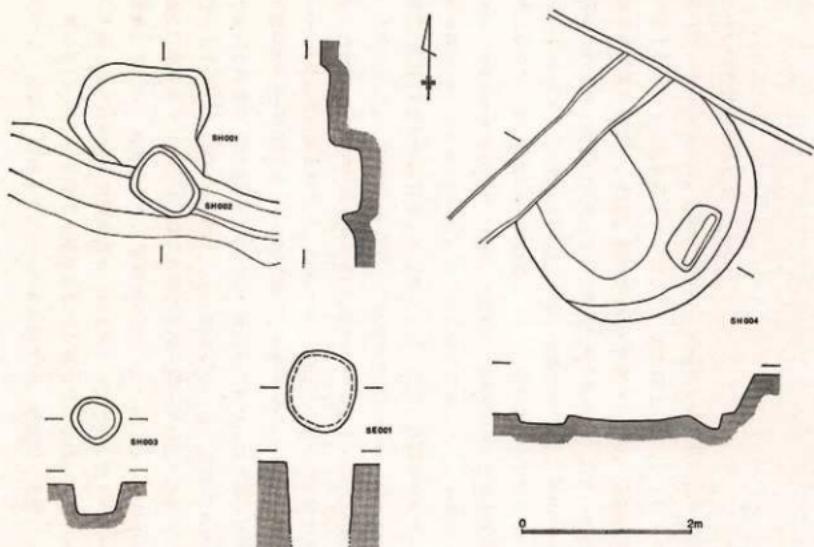
第4図 前方部南側調査区全測図 (1/200、A～C地点は花粉、胞子、珪藻分析試料採取地点)



第5図 前方部南側調査区土層断面図(1/40、□:花粉・胞子・珪藻分析試料採取土層)



第6図 前方部南側調査区 内掘内遺物出土位置図(1/120、数字は実測図の番号)



第7図 前方部南側調査区 土壌(SH)及び井戸(SE)実測図(1/60)

堀の深さは南辺で六〇～七〇センチ、東辺では四五～七〇センチ。堀底は南辺ではほぼ平坦であるが、東辺では調査区中央が深く、その両側では浅くなり、コーナー部では南辺の底と一〇～一五センチの段差が生じている。

覆土は南辺の西壁土層断面(第5図)では内堀と同様の埋没状態が観察されたが、東辺では第一層黒褐色土、第二層暗褐色土、第三層灰褐色土、第四層暗褐色土、第五層灰黒褐色土、第六層褐色土、第七層灰褐色土に分層された。東辺第三層は内堀第六層に、東辺第一、二層は内堀第四、五層に対比されよう。

南辺の北壁よりに検出された溝(SD003)は内堀の溝(SD001、002)と同じく、外堀に伴うものである。

埴輪は内堀にくらべ少ない。

その他の遺構

溝(SD001～005)、井戸跡(SE001～004)、土壌(SH001～004)を検出した(第4、7図)。

SD001、002は内堀の南辺に検出した。調査区西壁の土層断面(第5図)の観察から内堀に伴う溝であることを確認した。外堀の南辺に検出したSD0003もSD001～002と同一の覆土(褐色土)で外堀に伴う。いずれも堀の立上がり部にちかい堀底があり、堀のラインに平行している。SD001は幅五〇～六〇センチ、堀底からの深さ一四センチ、SD002は幅三八センチ、深さ一二センチ。SD003はわずかにカーブする部分があり、東端は井戸跡SE003に切られている。幅二六～三八センチ、深さ八センチ。SD004は調査区中央に東西方向に走り、内堀、中堀、外堀を切り、土壌SH002に切られている。走向はE～S、わずかに蛇行する。西端で幅四・二尺、底幅は

○・八・一・五層、深さは七六・八五センチである。北側壁に幅四五・五六センチ、深さ約六・七〇センチの小溝が平行して掘られている。周堀を接しているため覆土中には多量の埴輪が混入していた。とりわけ内堀コーナー部付近は顯著であった。埴輪のほか、陶磁器片が出土している。SD005は外堀東辺の東側ラインと平行し、ほぼ直線的にN-E 42° 方向にのびている。幅七〇・一〇センチ、深さ七〇センチ。出土遺物はないが、外堀はSD005の覆土を切つており(第5図)、愛宕山古墳に先行する時期の溝である。

井戸跡SE001は内堀コーナー部内側に、SE002はその西側、SE00

3、004は外堀南に検出された。四例とも平面円形、断面円筒形を示す素掘り井戸である。SE001は径八・八四センチ、SE002は径一・四層、SE003は径九・八×八四センチ、SE004は径八・一〇センチの規模である。SE002は堀底から約二〇センチ掘り下げたレベル(標高一六・八層)で湧水をみた。

土壤SH001、002(第7図)は内堀の南辺に検出した。SH002はSH001、SD004を切っているが、SH001とSD004の前後関係は明らかにできなかつた。SH001は長軸一・七層、内堀底からの深さ一〇センチ、SH002は八五・六七センチ、深さ四六センチ。SH003は井戸跡SE003の南に位置している。径六〇×五〇センチ、堀底からの深さ三六センチ。SH004は調査区の東隅に位置し、外堀、溝SD005を切つてある。重複する西側約三分の一のプランは明確にできなかつた。全形は(三・一) \times 二・九層前後の梢円形プランとなろう。深さ五六センチ。堀底の東側には八四×四二センチ、深さ六五センチの梯形の落ち込みがある。

〔二〕後円部東側調査区

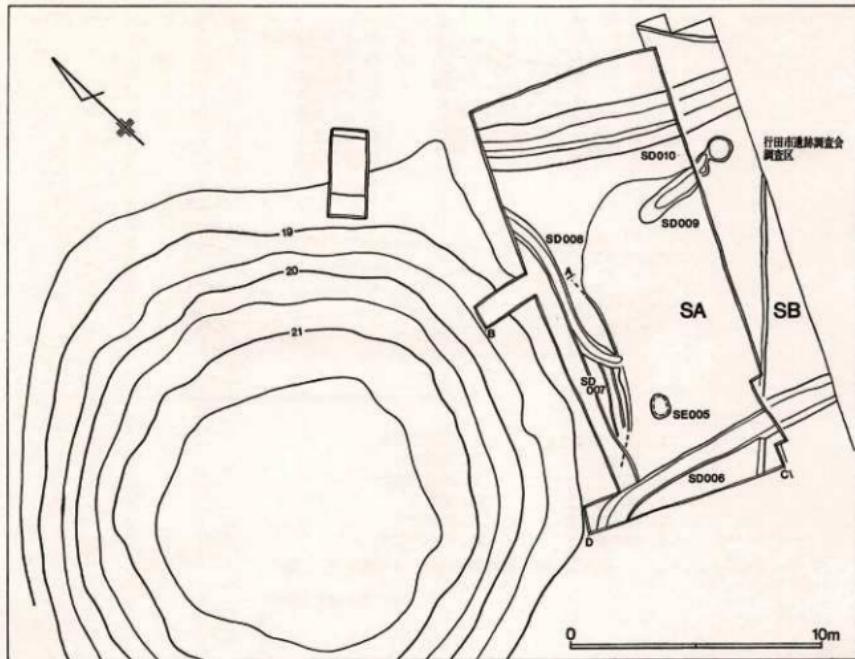
後円部調査区は後円部墳丘東側に内堀の範囲を明らかにするために設定した。調査の結果、内堀の外側ラインを調査区の南隅に検出することができた(第8図)。したがつて、後円部東側調査区は墳丘端から内堀範囲内にある。ほかに溝(SD006~010)、井戸跡(SE005)を検出した。

内 堀

調査区の南隅に検出した内堀の外側ラインはわずか一・三層であるが、行田市遺跡調査会による東側に隣接する道路敷地の発掘調査により、この延長部分が検出されている。この調査ではさらに内堀の北辺が東辺と直交する位置に検出され、愛宕山古墳の周堀の平面形が稻荷山古墳と同様に長方形を示すことが明らかとなつた。前方部調査区の成果と合わせると内堀の南北長は約六七・五層に復原できる。

内堀の墳丘側立上がり部は溝(SD007、008)と重複し、また、堀がわたり検出したにとどまつた。このため、墳丘北側に三・五×一・五層のトレンチを設定して内側立上がり部分を検査したが、溝SD010の延長部分を検出しただけで、墳丘端部を確認することはできなかつた。

堀の深さは外側で三六センチ、内側で一〇センチである。幅は最短部で約五・五層。覆土は第八層黒褐色土、第九層暗黒褐色土、第一〇層褐色土が主体となつてゐる(第9図)。調査区中央の墳丘サブトレンチでは第七層黒褐色土が旧表土と考えられる。



第8図 後円部東側調査区全測図

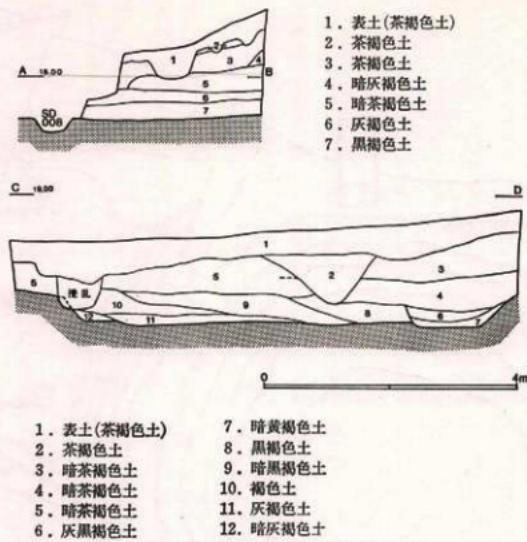
埴輪は調査区東側の中堤より多量に出土した(第10図、図版八)。形象埴輪がわずかにあるが円筒埴輪が圧倒的に多く、前方部調査区の東辺と同様に中堤から落ち込んだ状態で出土している。

その他の遺構

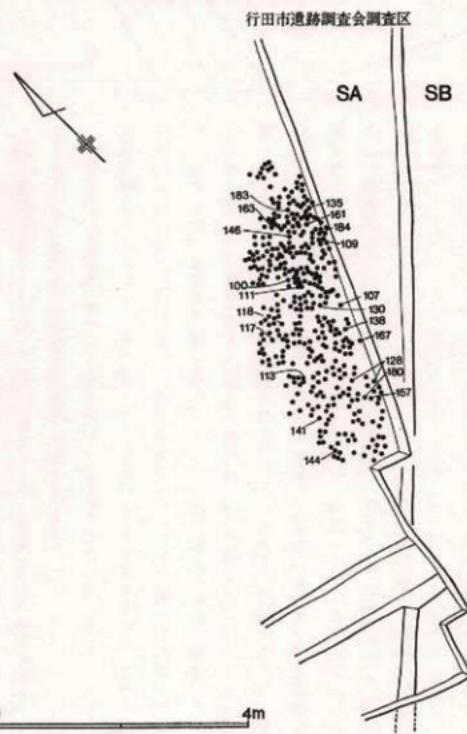
溝(SD006～010)、井戸跡(SE005)を検出した(第8図)。SD008を除き、愛宕山古墳築造以降の時期である。

SD006は調査区南側を東西に走り、西側では墳丘をよけるようにくびれ部方向にカーブしている。幅一〇八センチ、ローム層上面からの深さ六〇センチ、西から東に向いわずかに深くなる。SD007は内堀の内側立上がり部に検出した。北側をSD008に切られている。幅五〇センチ、深さ一〇センチ、走向N-35°-E。SD008は墳丘の裾に沿い、南側では逆にカーブし、内堀と重複している。前方部調査区のSD001～003と同様に堀に伴うものか明確にできなかつた。幅六七センチ、深さ二〇センチ。SD009は調査区東側に検出した。幅九〇センチ、深さ二八センチ、走向E-8°-S。行田市遺跡調査会の調査区で土壤状の落ち込みと重なる。SD010は調査区の北側に東西方向にのびる。幅二尺、深さ一・一尺、南壁に段にもち、断面は略連台形を示す。

井戸跡SE005は調査区の南側に検出した。前方部調査区の井戸跡と同形態である。径八六×六八センチ、堀底から約六〇センチ掘り下げ、一筋ボーリングしたが底にあたらなかつた。



第9図 後円部東側調査区 土層断面図 (1/80)



第10図 後円部東側調査区 内掘内遺物出土位置図(1/80、数字は実測図の番号)

二 遺 物

(一) 墳 輪

前方部南側、後円部東側両調査区で出土した遺物のうち、主体となるのは埴輪片であり、その中でも円筒埴輪が大部分である。

前方部調査区では内堀内の東南部コ一ナ一付近からの出土が、やや多く、これは中堤上に樹立されていたものが破損、転落したものと判断される状況であったが、中堤上にはその痕跡は残されていなかった。また、内堀内の他の部分でも比較的大型の破片が出土し、墳丘上から落ち込んで埋没したと思われるものもあった。一方、後円部東側調査区は、大部分が内堀内にあたるものであったが、中堤寄りの部分での出土が目立った。これは、隣接して実施された行田市遺跡調査会の市道域の発掘調査区内での遺構のありかたや遺物の出土状況から、中堤に樹立されたものが破損、転落したものであることが明らかであったが、墳丘寄りでは、墳丘上からの転落と思われるものも散見された。

このように、両調査区を通じ、原位置を留める埴輪は無かった。個々の詳細については観察表に記したとおりである。なお、円筒埴輪については実測図及び図版の番号は1588が前方部調査区出土、89-186は後円部調査区内堀内の出土である。また、実測図の断面の、口縁部内外の細線及び、タガの上下の細線は、その範囲が仕上げたヨコナデを施された範囲を示すものである。こうしたヨコナデによる仕上げについては強弱はあるものの各円筒埴輪に共通する技法があるので、観察表では端部内外面及びタガのヨコナデによる仕上げの記述は一切省略してある。

形象埴輪については、器種の判明するもので主要なものを見出しつつある。多くは後円部調査区の出土である。

円筒埴輪

出土した円筒埴輪は、技法的な面では、外面がタテハケメを施した後、粘土紐を貼付け、ヨコナデし（実測図各断面、細線の範囲）タガとしている。

ハケメは、深浅の差はあるものの、ヨコハケメ等の認められるものは見当らず、全てタテハケメのみである。一方内面はヨコハケメ、またはナナメハケメを残すものが多いが、基部から中位にかけ、タテないしナナメにナデるのもあり、各所にユビオサエ痕を残すものもある。

口縁部はいずれも端面を形成し、外表面をヨコナデして仕上げている（実測図断面、細線の範囲）。焼成については、確認できる限りでは黒斑の認められるものではなく、還元色を呈するものもあり、全て登り窯による焼成として誤りはない。

前方部南側調査区では、全体の形態がほぼ判明するものが7個体あった（157）。器高はいずれも約四〇センチメートルで、タガの間隔のバランスも近似しており、スカシも二段目及び三段目に一対ずつ互いに直角位置（7はやズレがあるが）になるよう穿孔されている。形態はいずれも円形か、不整円形で、複雑な穿孔のしかたをしている。（下から）二段目に穿孔されるものは、その段の間隔のためであるが、三段目のものより径が小さい傾向にある。

断面の形態は5が開き方が大きいが、他はいずれも体部中位がわずかに内湾氣味で、口縁部に至っては、外反して開く形態をとる。タガについて7がくずれた台形を呈する他は、偏平でくずれた「M」字形を呈しており、概し

て粗雑な作りである。内面はナナメハケメを主体として仕上げているが、1、4はユビオサエ痕が顕著に残され、7は最下段部分はタテのナデによつている。底面にはいずれも禾本科植物の茎と思われる棒状の圧痕が残される。色調については部分的に還元色を呈するもの（1、4）と、明黄灰色や灰茶褐色を呈するもの（2、3、7）がある。以上の七点については、高さ、口径、底径等の大きさ、タガの数やスカシの位置等についての近似を指摘できる。主要な円筒埴輪について、計測値の一覧表を作成したが、1～7は高さが三八～四二センチ、口径は二六～二八センチ、底径は一六～二〇センチと大きさについては四せんばの範囲内にある。各段については、最下段が一〇～一二センチ、第二段が五・五～七センチ、第三段六・五～八センチ、口径部段七～九センチ、と二せんばの範囲内にあり、タガについては基部幅が二～二・五センチであった。このように1～7は一見して大きさ、各段の幅等、近似するものであることがわかるが、各部の計測値からもそれが了解されるところである。これら規格性のある一群の円筒埴輪を「A類」の円筒埴輪と呼び説明を進めるが、さらにタガの断面の形状から、断面が偏平な「M」字形で、粗雑なヨコナデで仕上げのもの（1～6）を「A類」、くずれた台形を呈するが比較的きちんととした強目のヨコナデをして仕上げるもの（7）を「A₂類」としておく。

8～10は、口縁部または底部付近の形態がある程度明らかになつたもので、10は最下段の幅が広目であるが、いずれも先に述べたA類と思われるものである。8はA₁類、9はA₂類で、それぞれ内面にユビオサエ痕が顕著に残る部分があり、10はA₂類でナナメの幅の広いナデにより仕上げている。11は体部中位以上しか形態が判明しないが、口径が三四センチでA類より一回り大きなもので外面最上段に墨印〔×〕が認められる。一方、後円部

東側調査区出土の89は高さが六三センチ、口径約三六センチで、最下段の幅が二三センチと、他の段に比べ広い特徴を有するものである。口縁部の屈曲のしかたやす法的に二せんば程度の差はあるが、11に類する形態と思われる。12、14も三段目の中位以上を欠いているが、最下段の幅からして、同様に、89に類似する形態と思われる。これらを総括し、「B類」と呼ぶこととするが、全体の器形の判明している89、一個体を基本としたもので、「A類より大型で最下段の幅が広く、タガの形状がくずれた台形を主体としている」と頗推されるものを含む一群であることを付言しておく。

15以下44は口縁部破片だが、15はB類、それ以外の16、18～24等はA類である。何れも外表面は、左傾するものを含むが、タテハケメ、内面はヨコないしナナメのハケメを施しユビオサエ痕を残すものもある。口縁部は開き方に種々のバリエーションを持ち、スカシの認められるものは、何れも円形を基本とするものである。

45～75は体部破片である。外表面はタテハケメ、内面はヨコハケメまたはナナメのナデが施されるが、51、65、67のようにユビオサエ痕を顕著に残すものもある。45はB類、46、47、49等はA類である。スカシの認められるものはいずれも円形と思われるものである。

76～88は、底部破片である。外表面はタテハケメ、内面はナナメハケメのものが多いか、ナナメナデのもの（76）もある。76、78、83はA類である。底面には禾本科植物の茎の棒状の圧痕を残すものが大半である。

次に、後円部東側調査区出土のものであるが、前方部南側調査区に比べ、全体の形態がほぼ判明するものは89のみであった。89についてはB類としてすでに触れたところであるが、最下段が他の段に

比べ広目である。外面はタテハケメ、内面はヨコハケメないしナナメハケメが施されるが、部分的にナデが認められ、また、底面には棒状の圧痕が残される。スカシは不整円形で、二段目及び三段目に一対ずつ互いに直角位置に穿孔されており、この点はA類と同様である。タガはくずれをみせる台形である。

90は二段目中位以上の形態の判明するもので、B類である。スカシは89と同様な部分に穿孔される。

91～111は口縁部破片である。いずれも外面はタテハケメ、内面はナナメハケメが認められ、端部には面が形成され、内外をヨコナデして仕上げている。91～95はB類、96はA類である。その他については、前方部調査区でA類としたものとは胎土、色調を異にするものが大半で、多くはB類と考えられるものである。

112は朝顔形円筒埴輪の口縁部破片で、外面はタテ、内面はヨコハケメが認められる。器厚が大きく、B類を上回る大形品であろう。

113～165は体部破片である。外面はタテハケメが施され、例外はなく、内面はナナメハケメ、ないしナナメのナデが施される。113～115はB類であるが、その他、口縁部直下の126もB類で、その他、段の幅から、122、127もB類と推測され、B類の円筒埴輪が比較的多数を占めていることを部破片からも指摘しうる。もち論、B類の主なタガの形状であるくずれた台形を呈するものが多く、スカシについては円形と推定されるものばかりである。

さて、こうした円筒埴輪の中、やや厚手で、A、B類に比較すると幅も広目で、高さも高く、しっかりとした台形のタガを有する破片があった。116、159がそれであるが、これらはいずれも色調が明るい灰褐色ないし灰白色

に近い色調で、A類、B類とは胎土、焼成も異にするものである。さらに、116にはスカシが認められるが、その遺存部分からすると、長方形と判断して良いものである。大きさは、B類より大型になることは体部の弧の描き具合などからほぼ誤りのないところであり多段凸帯の大型品と思われるものであるが、そのタガの本数や段数については推定の手掛りがない。こうした一群はA、B類と一見して区別が可能であり、「C類」と呼称することにする。

磨滅して不明瞭なものもあるが破片の観察からは、技術的には外面がタテハケメであり、内面はヨコハケメないしナデと、基本的にA、B類と同様と思われる。

166～186は底部破片である。外面はタテハケメ、内面はナナメハケメ、又はタテ方向、ナナメ方向の幅の広いナデが施されているが、181のようにタテハケメの下に荒いヨコハケメが認められるものもあった。最下部は肥厚するものが多く、180、186のように内側が突出するものもある。底面には、禾本科植物の茎の棒状の圧痕を残すものがほとんどである。

形象埴輪

形象埴輪はいずれも破片であったが種類の判明するものもいくつかあった。187～189は大刀形埴輪の一部である。いずれも勾金の部分であるが、187はやや大型のものと思われ、三輪玉が二つ接合したが、脱落痕が他に四箇所認められる。188、189は勾金の上端部分であるが、188に瘤状に付けられたものは三輪玉と思われるが、かなり退化した表現である。図示した以外にも大刀形埴輪の柄頭部分の破片もあったが、全て後円部東側調査区の出土である。190、191は蓋形埴輪の破片で、頂上部の飾りの一部分と思われる。190はその蓋との接合部分、191は先端部の破片と思われるが、図示した以外にも破片が

十片ほどある。全て後円部東側調査区の出土である。

192は人物埴輪の佩用する大刀の柄頭かとも思われるもので、胎土は187と同様である。

この他、図示し得なかつたが、盾形と思われる埴輪の破片が前方部南側、後円部東側両調査区で、家形、馬形と思われるものが前方部南側調査区で発見されているが、形象埴輪については、概して前方部南側より後円部東側調査区の方がはるかに出土点数が多い。この他、彈琴人物埴輪の琴と思われる破片もあり、また、後円部東側調査区の隣接する地区の行田市遺跡調査会の調査の際に、人物埴輪の頭部も出土している(図版二三)。

以上、埴輪について述べてきたが、前方部南側調査区と後円部東側調査区ではやや様相が異なることが指摘できる。すなわち、円筒埴輪では前方部調査区出土のものは、A類が主体となっており、後円部調査区ではB類が主体となつていていることである。さらに、形象埴輪に関しては、前方部調査区でも散見するが、その多くが後円部調査区の出土であった。

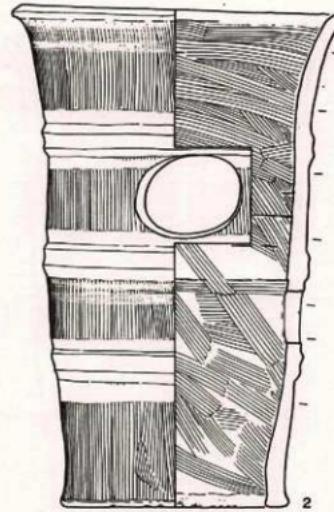
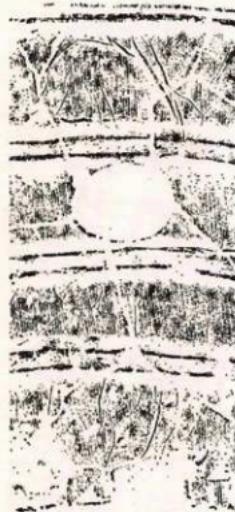
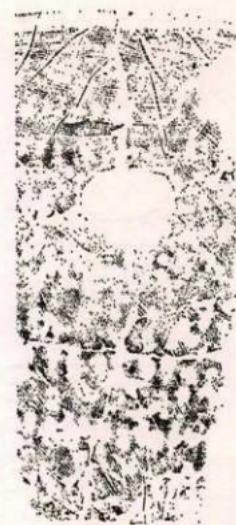
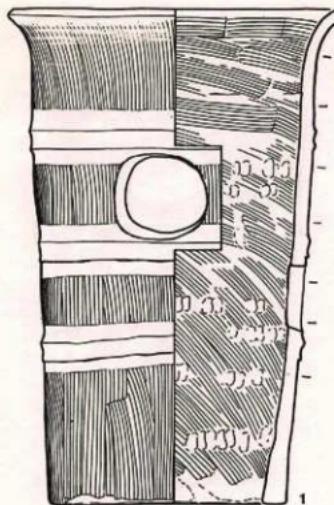
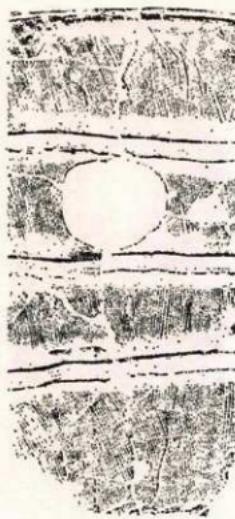
(二) 土師器及び須恵器

古墳に係る出土遺物としては、埴輪の他に若干の土師器片及び須恵器片があつたが、小破片が多く、土師器は図示に耐え得るものがない。一方、須恵器についても形態の判明するものではなく、わずかに甕の体部破片が數点あつたので、それらを図示しておく(193~200)。

いずれも外面には平行タタキメ、内面は同心円タタキメが例外なく認められる。多くが後円部東側調査区からの出土である。

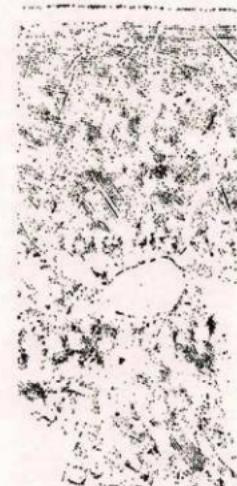
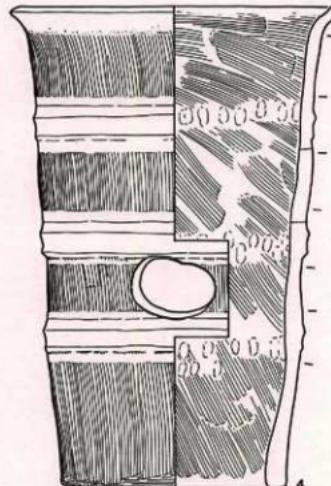
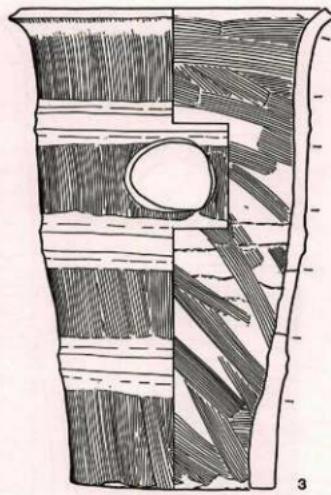
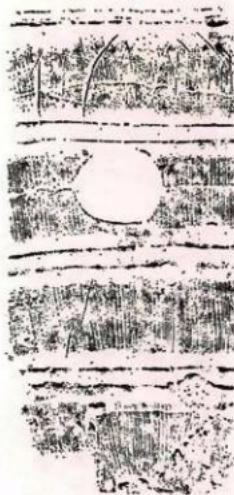
第1表 主要な円筒埴輪の計測値(単位:cm、5mm以下は4捨5入、()内は推定)

No.	大きさ			各段の幅				凸沿(タガ)の幅(基部)				分類	
	器高	口径径		底径	最下段	第2段	第3段	口絶段	形態	下	中	上	
		口徑径	底径										
1	39.5	26.5	18.5		11.0	5.5~7.0	6.5	7.0~8.5	M字	2.5	←	←	A1
2	39.5	(26)	17.5		10.5	6.0	7.0~8.0	9.0	〃	2.5	←	←	〃
3	38.0	(28)	16.0		8.5	7.0	8.0	8.0	〃	2.5	←	←	〃
4	38.5	26.5	(18)		11.0	5.5	7.0	7.0~8.5	7.5	2.5	←	←	〃
5	41.5	30.5	17.5	11.5~13.0	6.5~7.5			7.5	〃	2.5	←	←	〃
6	42.0	(28)	(21)	13.0	7.0			7.5	〃	2.5	←	←	〃
7	40.0~41.0	27.5	19.0~20.5	10.5~12.0	7.0	8.0	8.0	8.0	台形	2.0	↑	↑	A2
8	—	(28)	—	—	—	7.0	7.5~9.0	M字	—	—	2.5	↑	A1
9	—	28.0	—	—	—	—	9.5~11.0	台形	—	—	—	—	A1
10	—	—	19.0~20.0	13.0	6.5	—	—	—	〃	1.8	2.0	—	〃
11	—	—	30.0~31.0	—	—	—	—	13.0~15.5	—	—	—	—	B
12	—	—	18.0	21.5	11.0	—	—	—	〃	2.0	—	—	〃
13	—	—	22.0	23.5	—	—	—	—	〃	2.0	—	—	〃
14	—	(20)	22.5~24.0	10.0	—	—	—	—	—	2.5	↑	—	B
15	—	—	—	—	—	10.5	11.5	〃	—	—	2.0	—	A2
16	—	—	—	—	—	6.5	7.5	〃	—	—	—	—	A2
24	—	—	—	—	—	6.0	8.0	M字	—	—	2.5	↑	B
89	64.0	(34)	(22)	21.5	11.5	11.0~13.5	11.5~12.5	台形	2.0	↑	—	—	A1
90	—	(34)	—	—	—	—	13.0	13.5	〃	—	1.8~2.5	—	〃
91	—	—	—	—	—	—	11以上	12.0	〃	—	—	—	2.0
92	—	—	—	—	—	—	11.0	12.0	〃	—	2.0	—	〃
94	—	—	—	—	—	—	9.0	12.5	〃	—	2.0	—	〃
113	—	—	—	—	—	10.5	9.5以上	—	—	2.0	↑	—	〃
114	—	—	—	—	—	10.5	10.0	—	—	2.0	↑	—	〃
115	—	—	—	—	—	12.0	—	—	—	2.0	—	—	〃



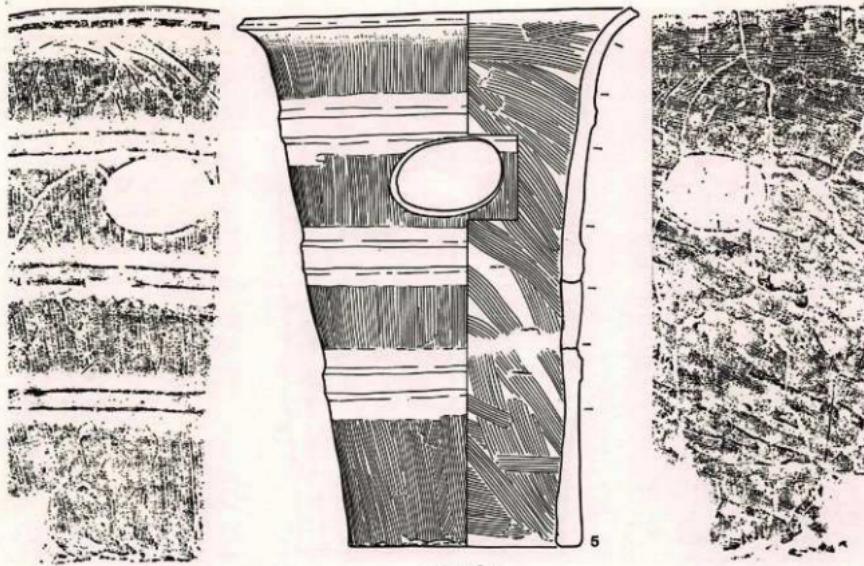
0 20cm

第11図 前方部南側調査区出土遺物 1 (1, 2)

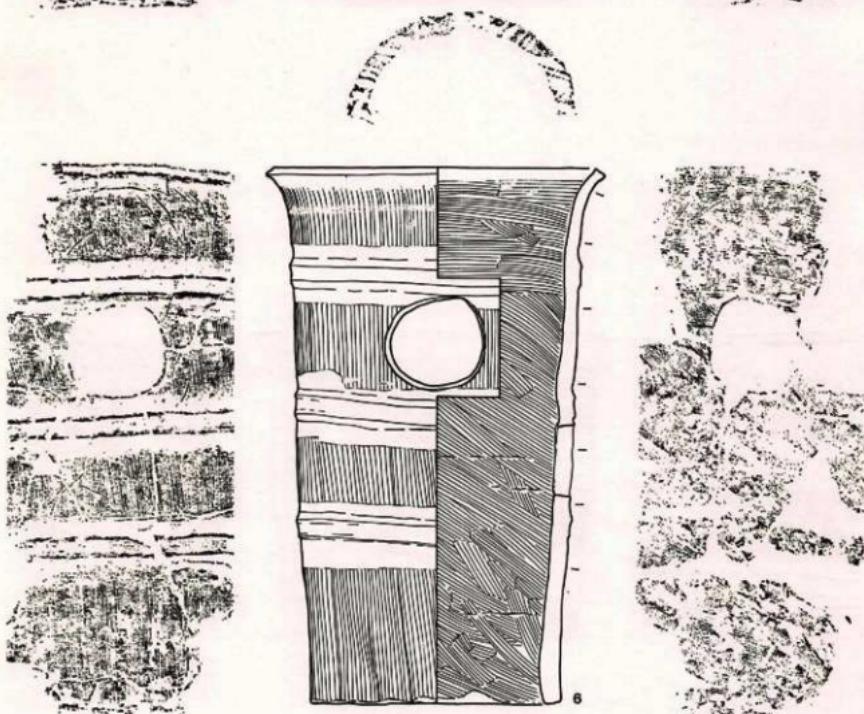


0 20cm

第12図 前方部南側調査区出土遺物2(3, 4)

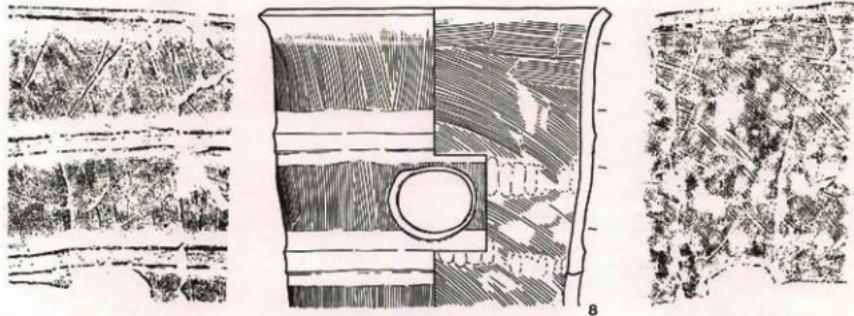
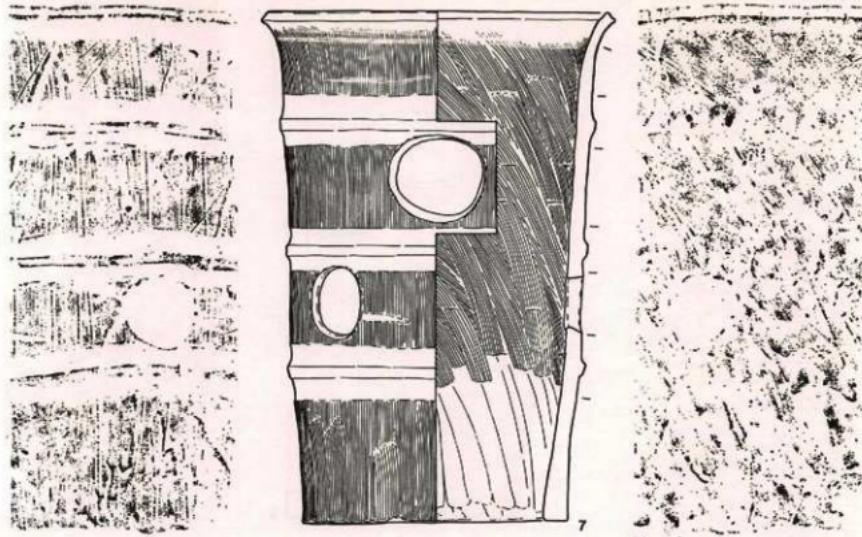


5



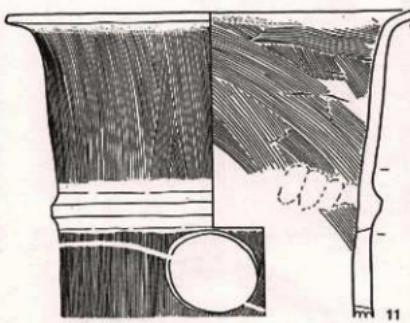
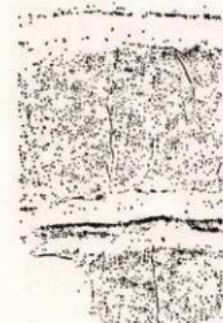
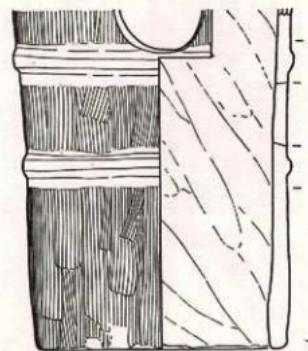
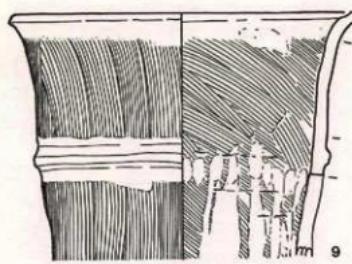
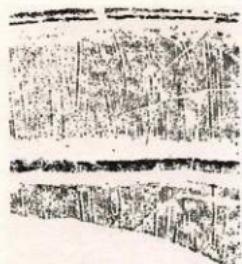
6

第13図 前方部南側調査区出土遺物3(5、6)

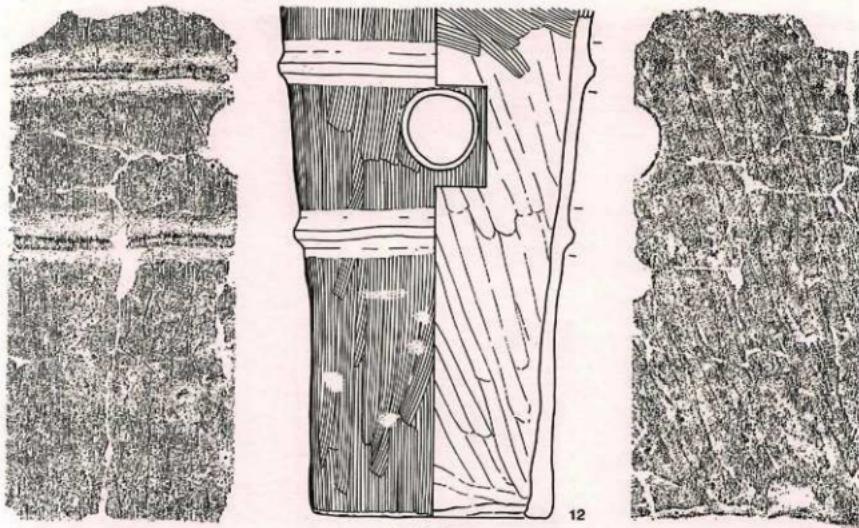


0 20cm

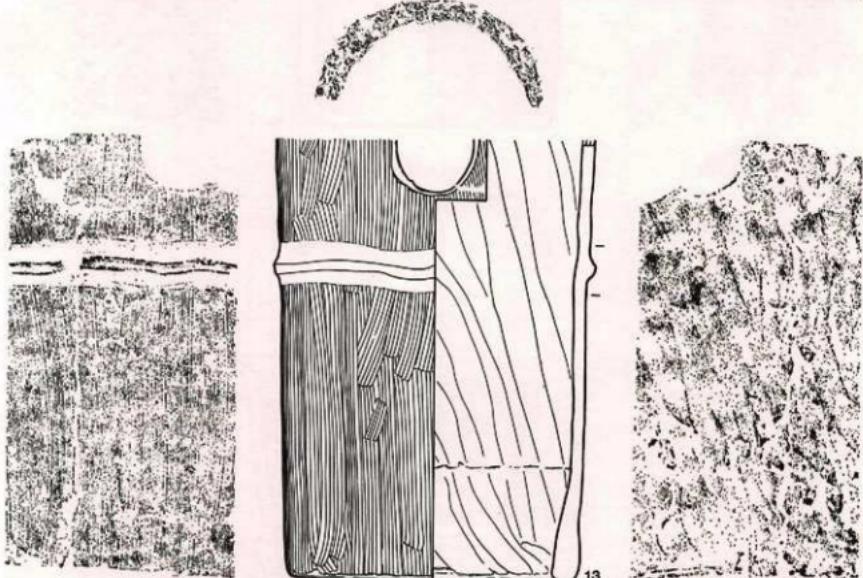
第14図 前方部南側調査区出土遺物4(7、8)



第15図 前方部南側調査区出土遺物 5 (9~11)



12



13



0 20cm

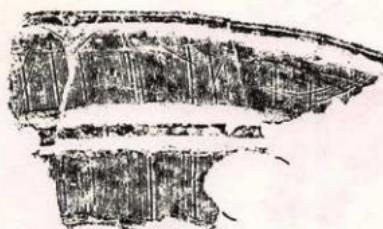
第16図 前方部南側調査区出土遺物6(12、13)



14

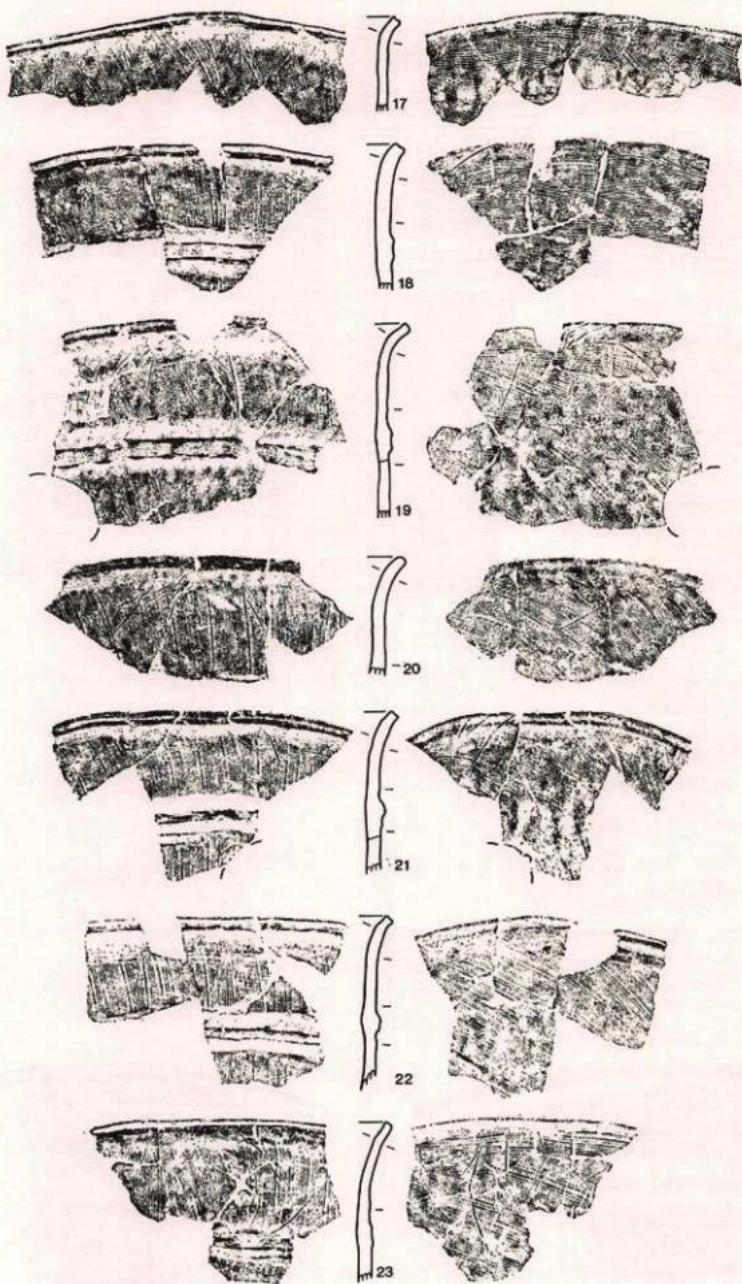


15

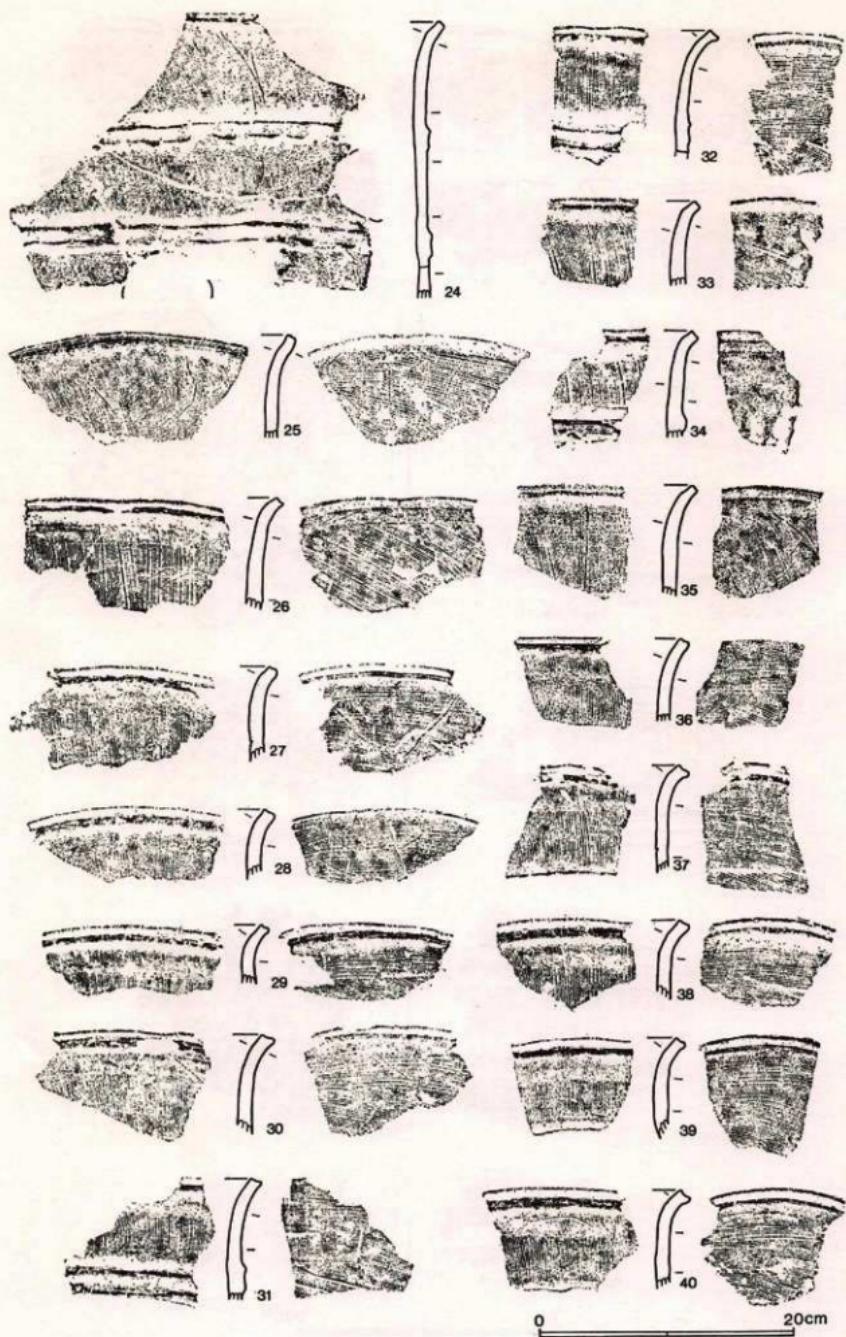


16

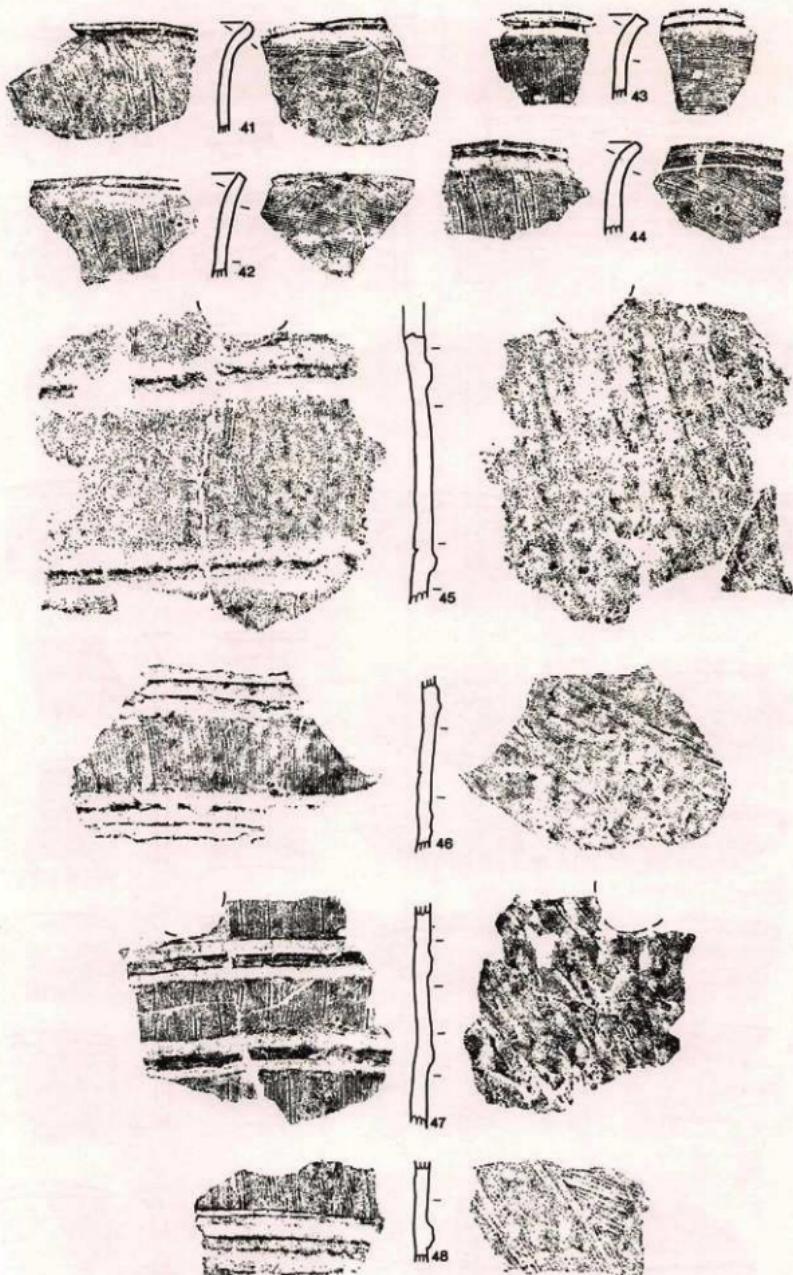
0 20cm
第17図 前方部南側調査区出土遺物7 (14~16)



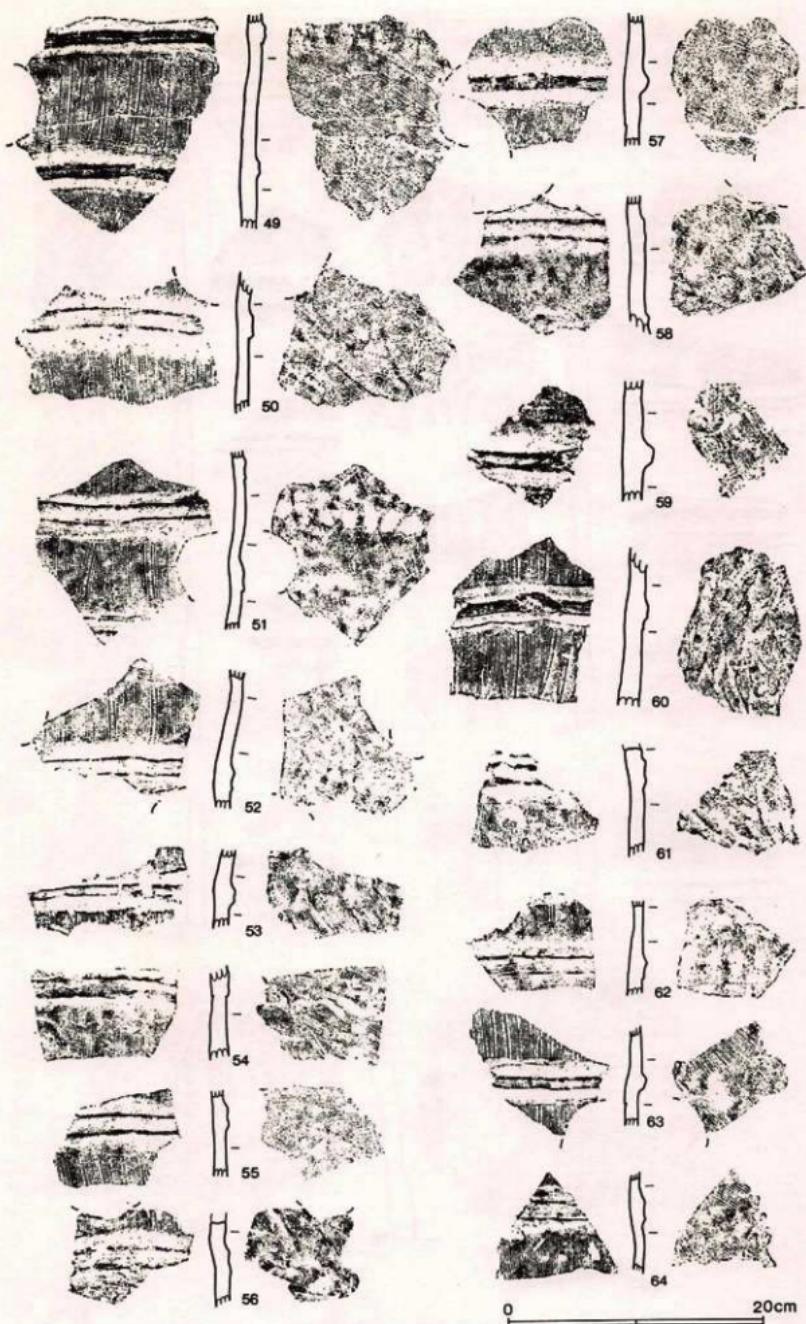
第18図 前方部南側調査区出土遺物 8 (17~23)



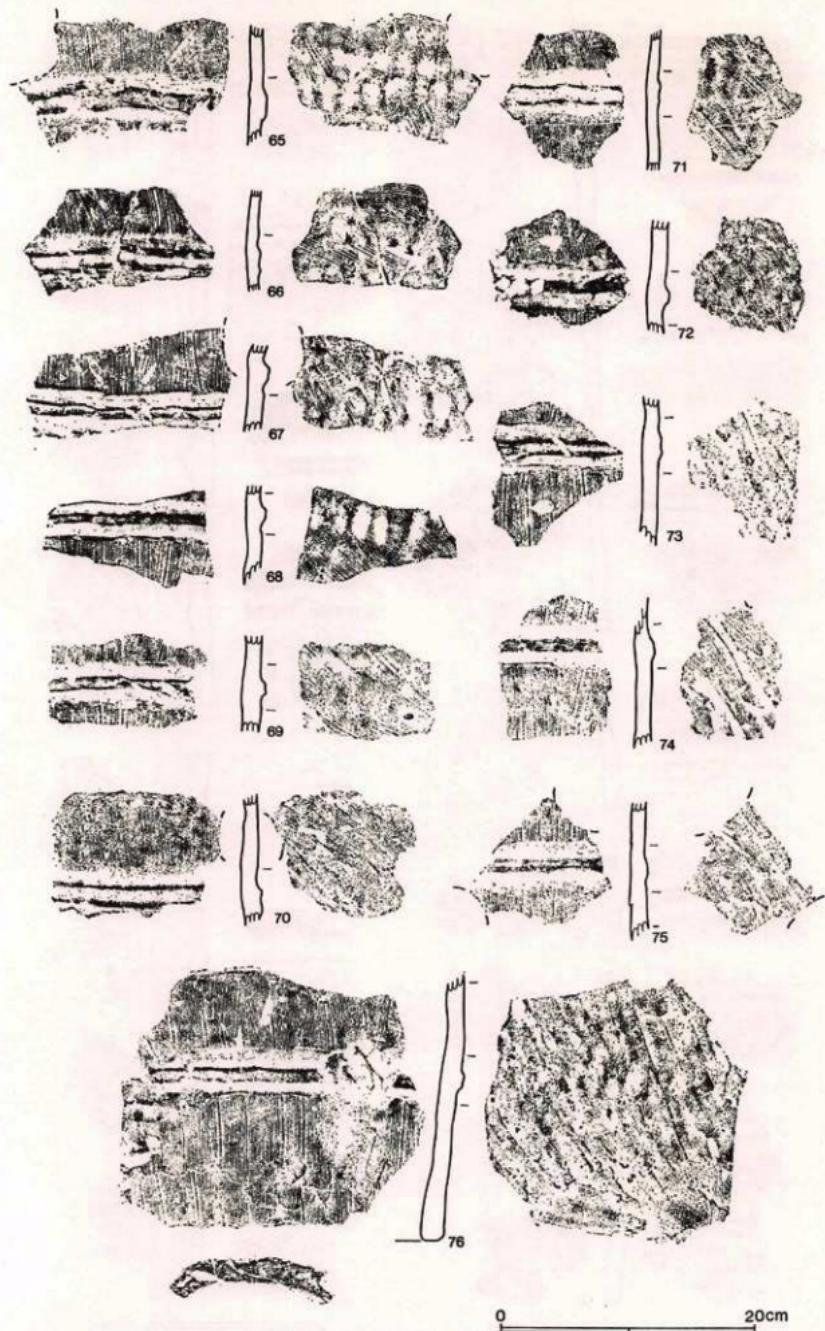
第19図 前方部南側調査区出土遺物 9 (24~40)



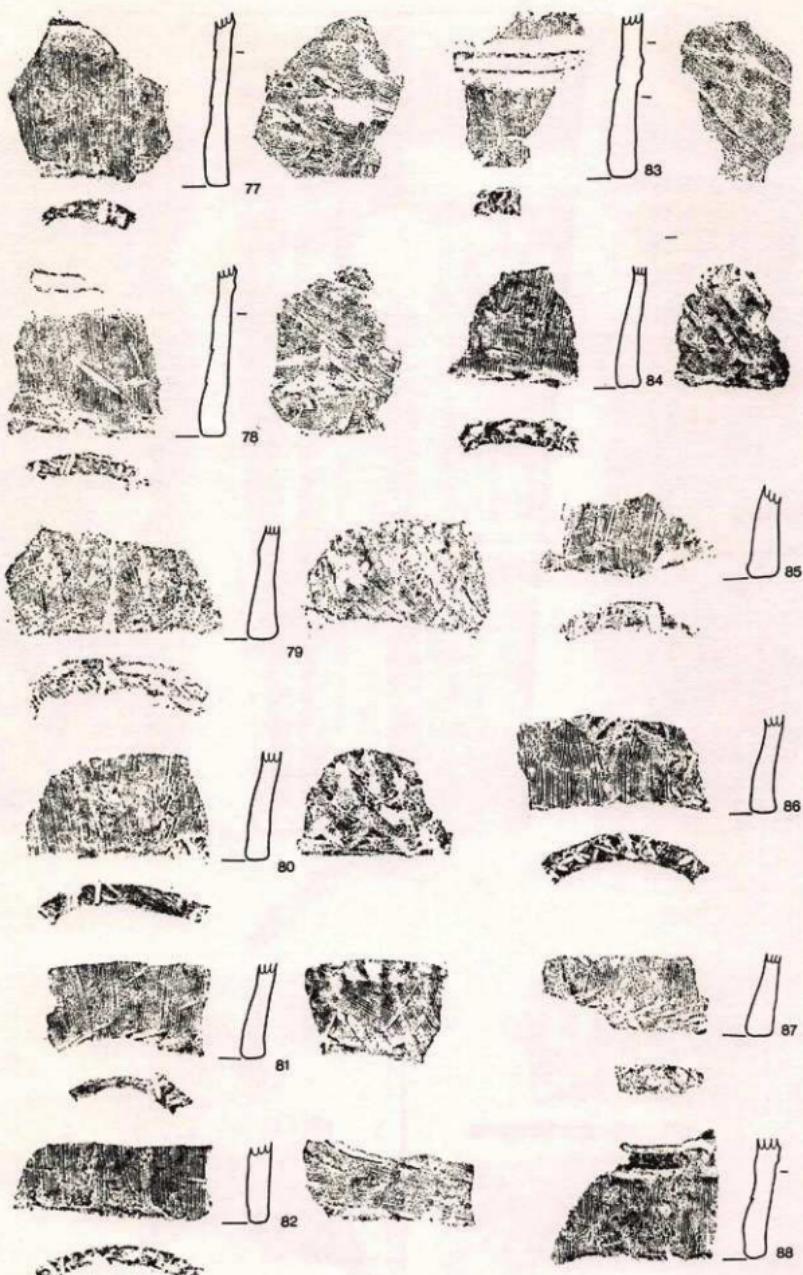
第20図 前方部南側調査区出土遺物10 (41~48)



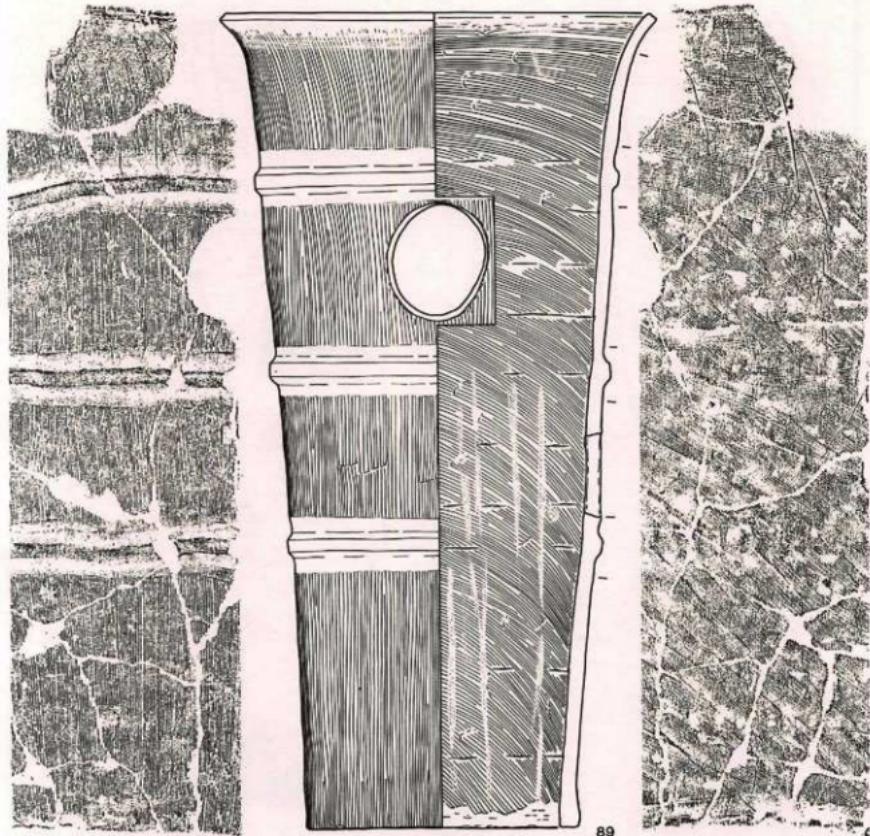
第21図 前方部南側調査区出土遺物11 (49~64)



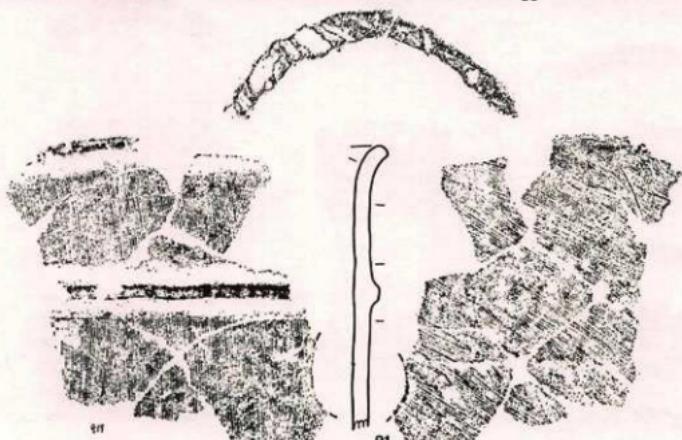
第22図 前方部南側調査区出土遺物12 (65~76)



第23図 前方部南側調査区出土遺物13 (77~88)



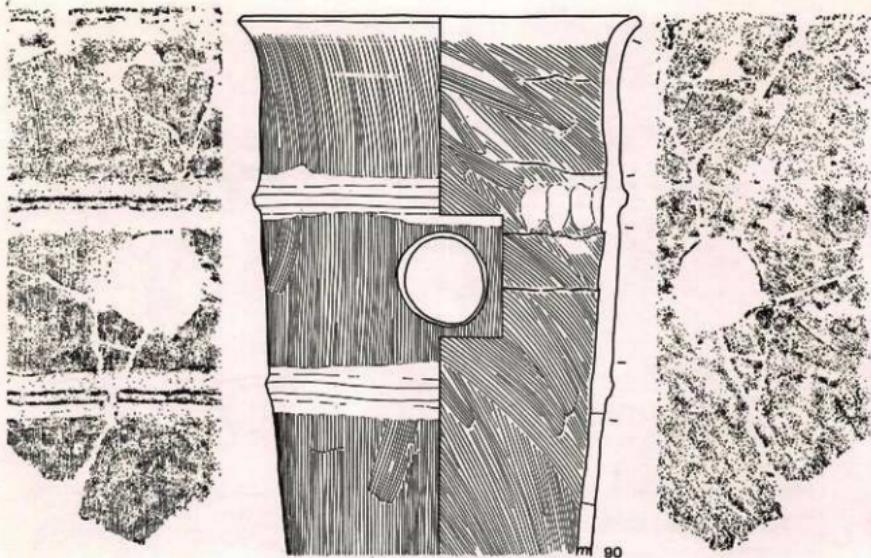
89



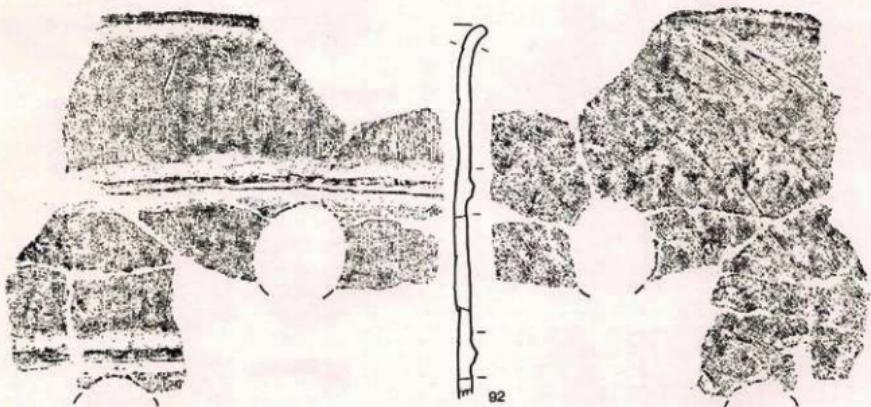
91

0 20cm

第24図 後円部東側調査区出土遺物1(89、91)



90



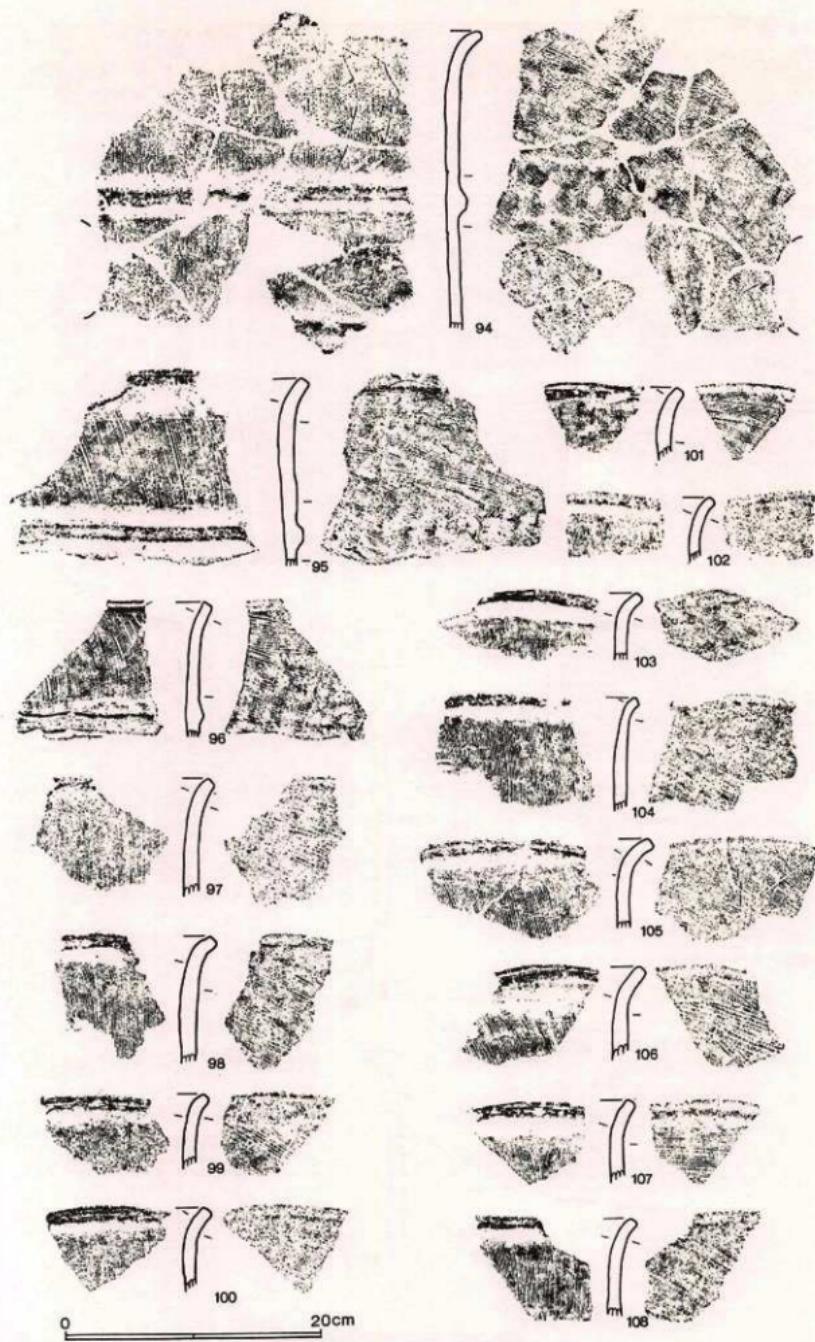
92



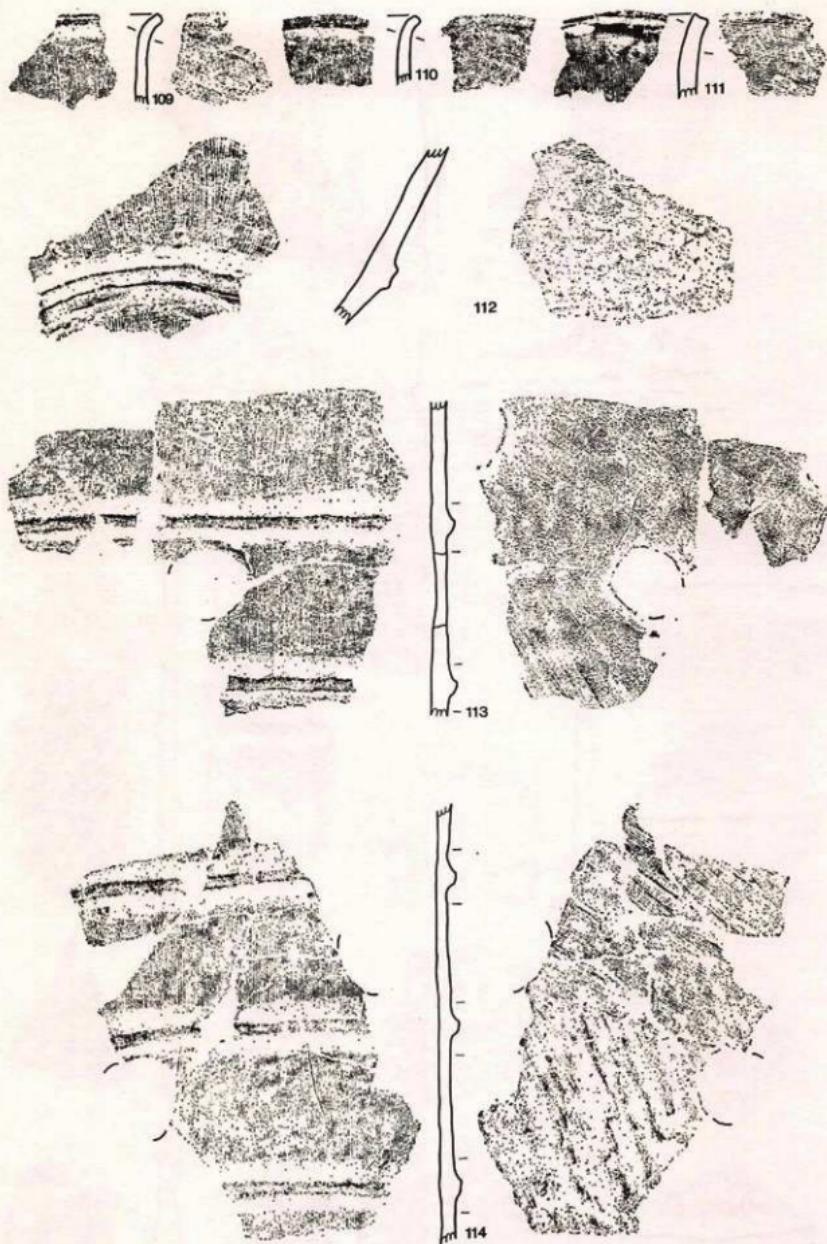
93

第25図 後内部東側調査区出土遺物2 (90、92、93)

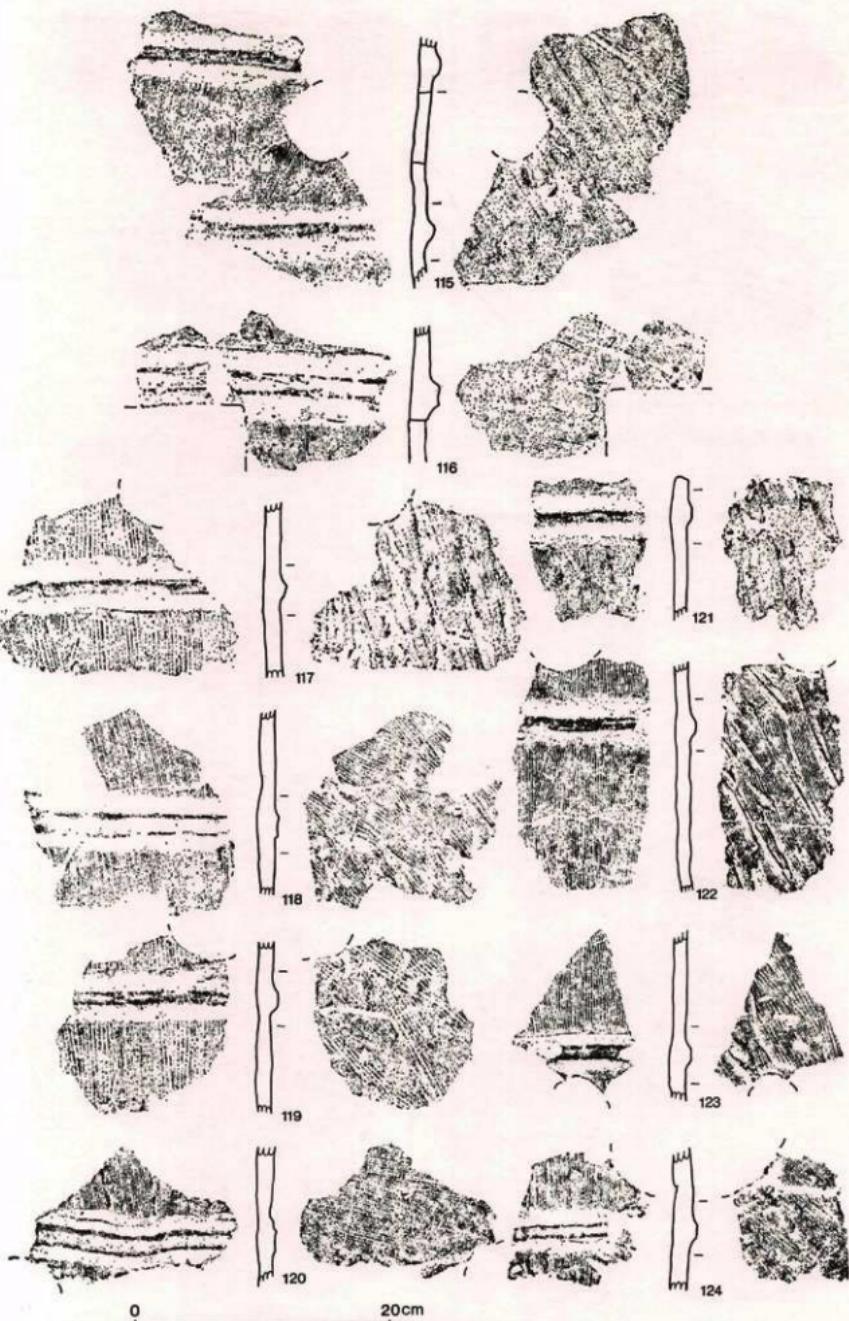
0 20cm



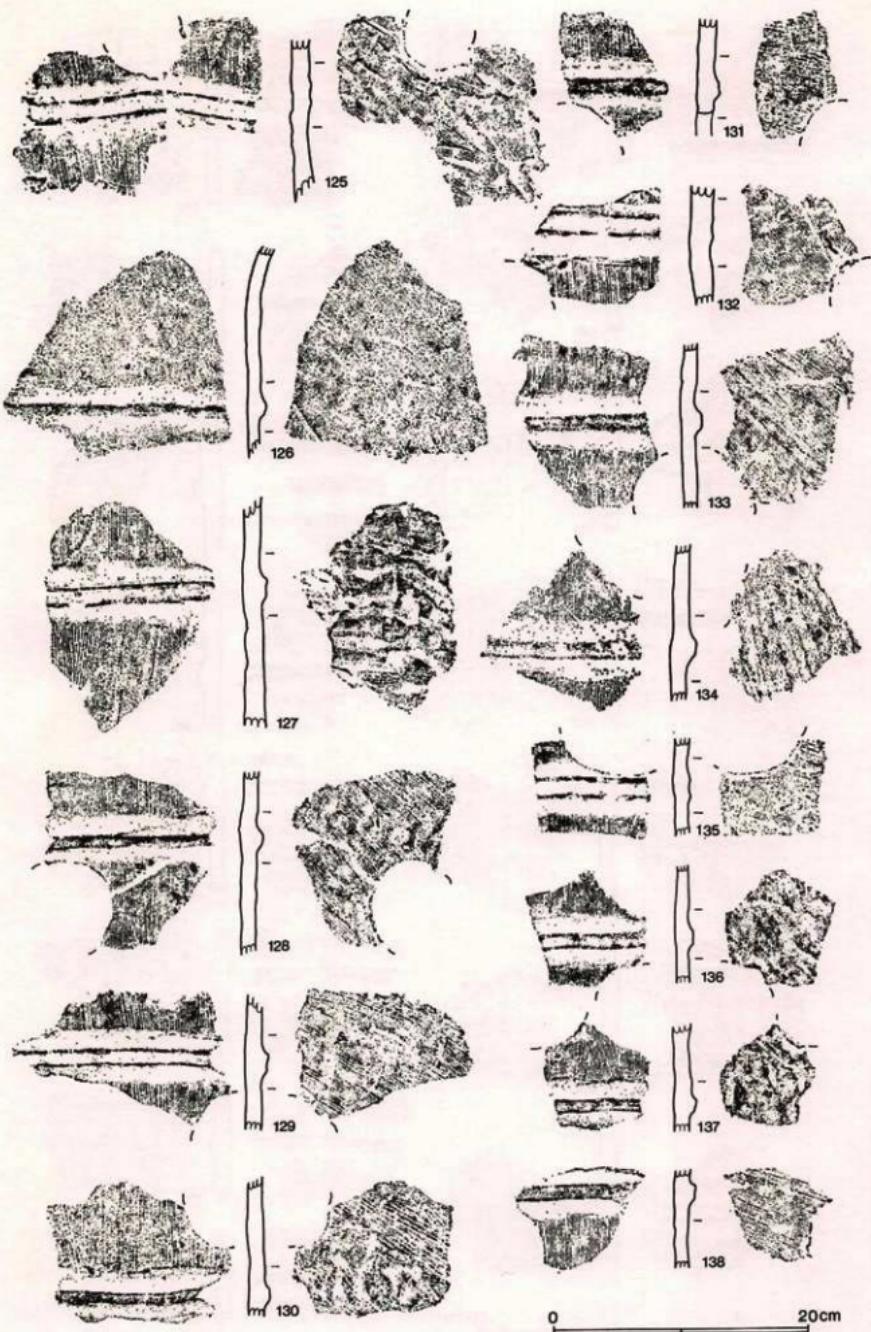
第26図 後円部東側調査区出土遺物3 (94~108)



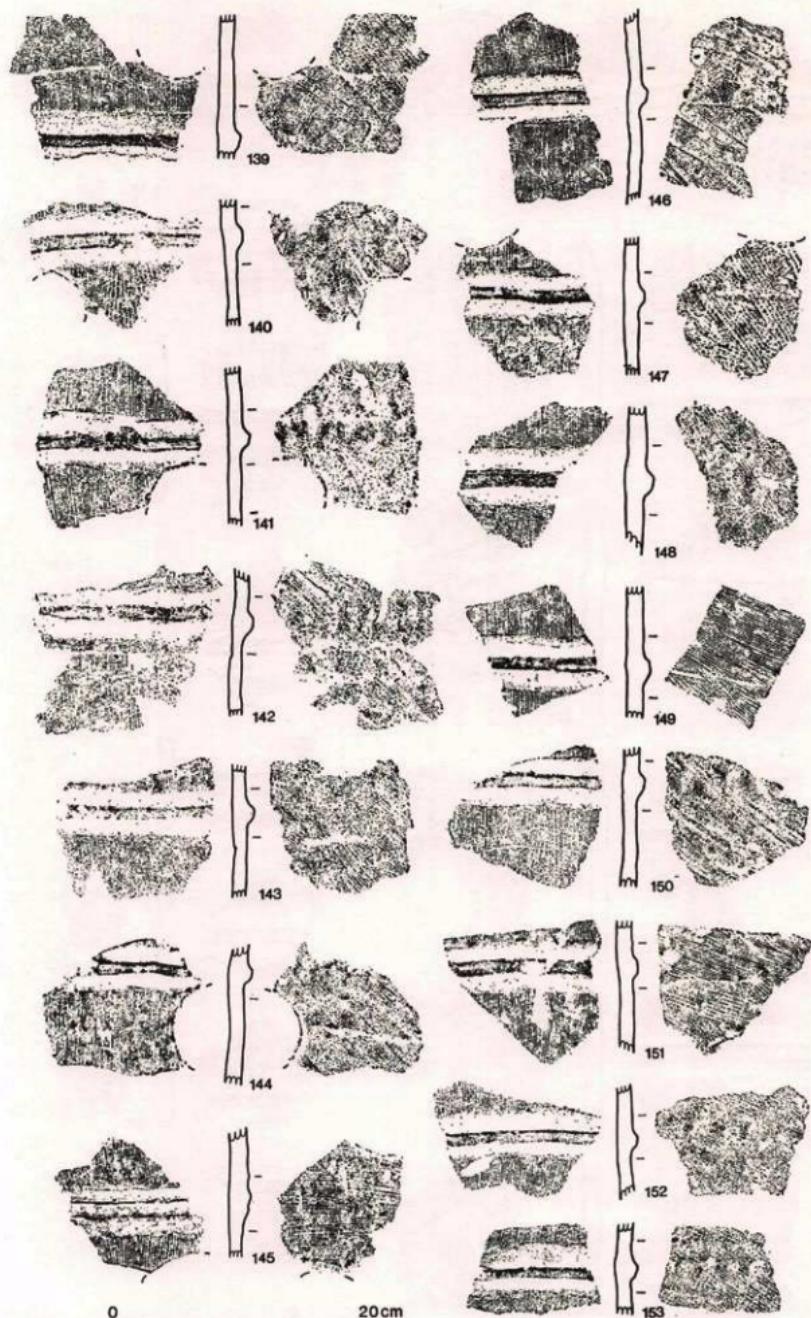
第27図 後内部東側調査区出土遺物4 (109~114)



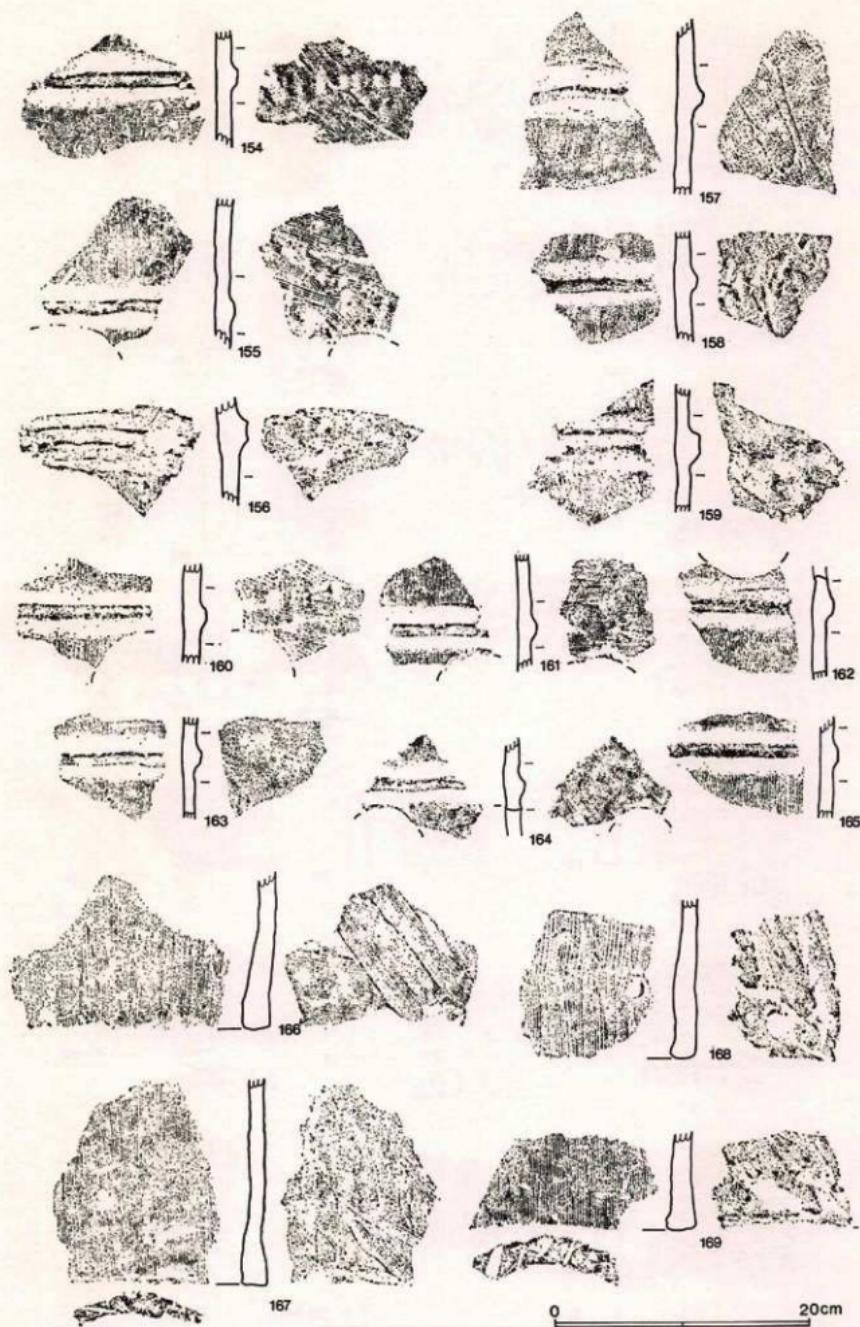
第28図 後円部東側調査区出土遺物5 (115~124)



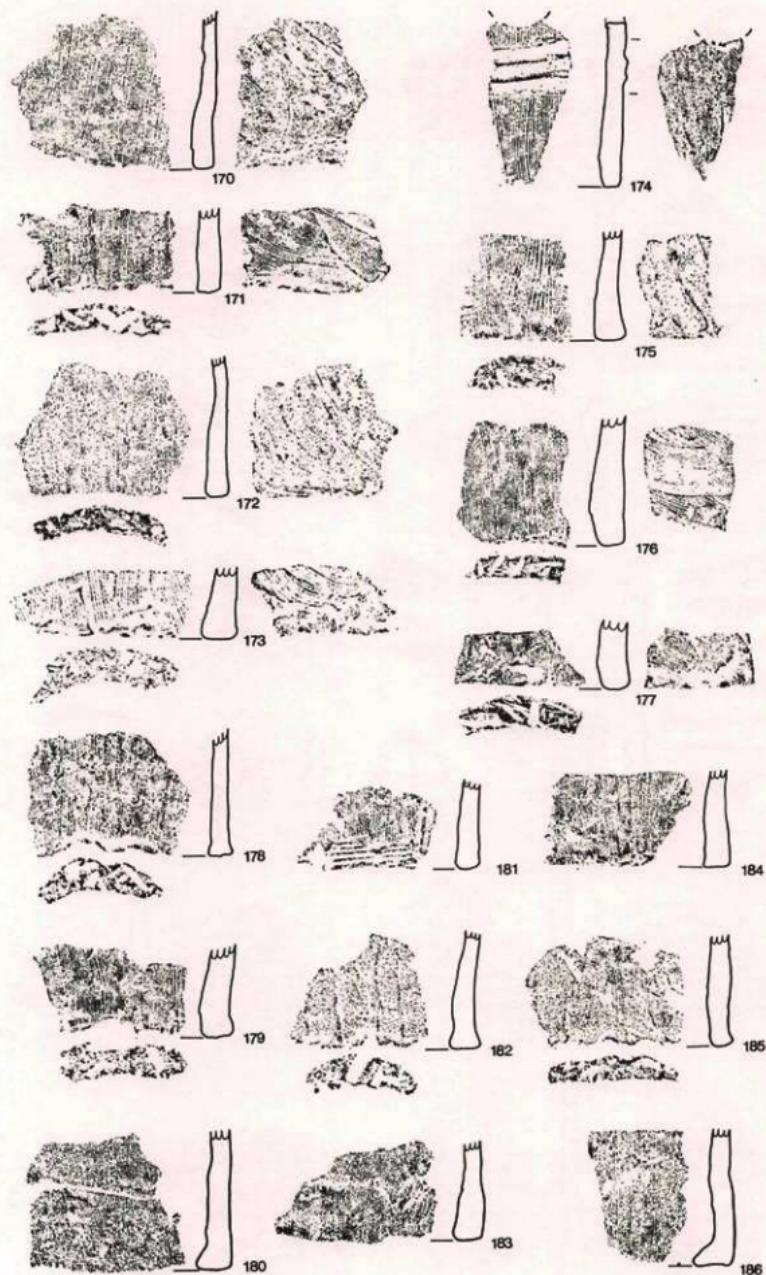
第29図 後内部東側調査区出土遺物 6 (125~138)



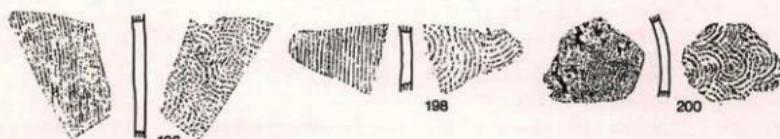
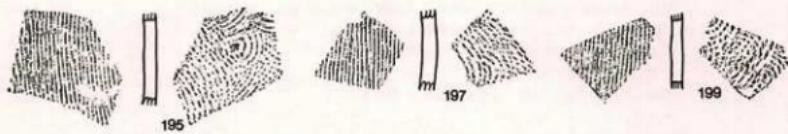
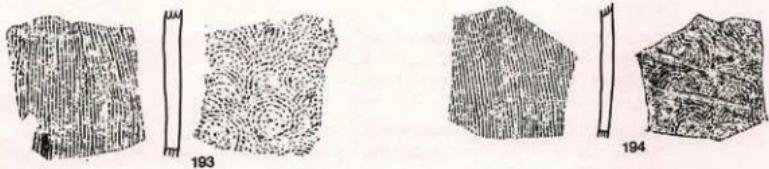
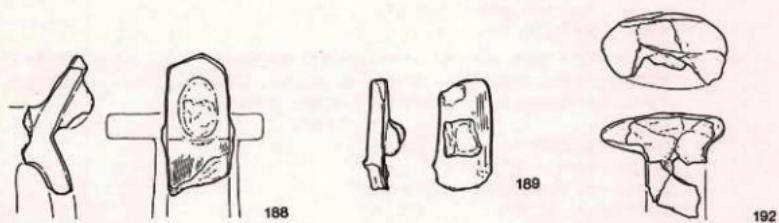
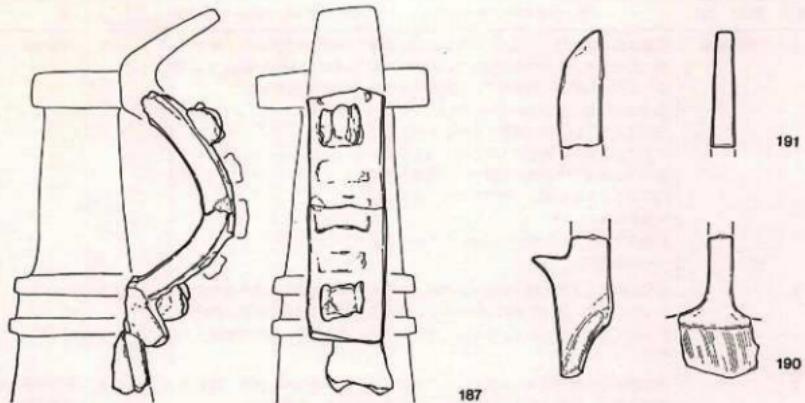
第30図 後内部東側調査区出土遺物 7 (139~153)



第31図 後内部東側調査区出土遺物 8 (154~169)



第32図 後円部東側調査区出土遺物9 (170~186)



0

20 cm

第33図 形象埴輪（187～192）及び須恵器（193～200）

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備考
1	円筒埴輪	底部は底面にかけながらかに肥厚し底面には棒状の圧痕あり、体部は内湾氣味で、口縁に向うにしたがい、わずかに径を増す。口縁部は外方に屈曲して開き、端面はわずかに凹む。 外面はタテないし左に傾斜するナナメハケメ、タガは3本あり、偏平でくずれた「M」字形、上から2段目、3段目に一对づつ、直角方向に四形のスカシが上部から右回りにえぐるように穿孔される。 内面はナナメないしヨコハケメ、各所にユビオサエ痕を残す。	砂粒を多量に含み、灰色朱を帯びた褐色を基調とし、部分的に灰色となる。 焼成堅緻。	1.8	内堀内出土。
2	"	形態的には1と略同様。底部は底面直上で純くわずかに突出し底面に棒状の圧痕あり。口縁部はゆるく外反氣味に開く。タガはくずれた「M」字形。	細砂を含み、内外明灰褐色 断面は明るい灰色。焼けしまり欠く。内外ややマツツ	1.8	"
3	"	形態的には1と略同様だが底径がやや小さい。底部は厚く、底面に棒状の圧痕残る。内面はナナメないしヨコハケメ、各所に接合痕を残す。タガはごく偏平な「M」字形。	細砂を含み、内外、断面共明るい黄灰褐色。	1.4~1.6	約半周強を欠く。 内堀内出土。
4	"	基本的な形態は1と同様。底部は厚く、底面には棒状の圧痕が残る。口縁部は短く屈曲氣味に開き、端部内面直下はヨコナデによりわずかに凹む。 外面はわずかに左傾するタテハケメ、基底部外面は先行してヨコハケメ内面はナナメハケメで部分的にナデ、オサニ痕を各所に残す。タガは偏平でくずれた「M」字形。スカシは底部から2段、3段目にあけられる。2段目のものは切り始めと終りが不連続で、右回りにえぐるように穿孔されており、ナデによる仕上げや面取りも行なわれていない。	外面は上半が茶味のある灰色(還元色)、下半は黄灰~灰褐色、内面は黄色味のある茶色。	1.8	半周強を欠く。 内堀内出土。
5	"	基本的形態は1と略同様だが口縁部にかけての開き方が大きくなる。上から2段目のスカシは横長の円形(梢円形)。タガは偏平でくずれた「M」字形	細砂を含み、内外共明るい灰茶褐色。	1.5	内堀内出土。
6	"	基本的形態は1と略同様。底部は内側がやや肥厚する。外面タテハケメ、やや左傾底部は表面削落する部分あり。内面中位以下はナナメ、口縁部付近はヨコハケメ。	白色の細砂を多量に含む。内外共明るい灰褐色、断面は暗灰色。	1.4	"
7	"	基本的形態は1と略同様。スカシの位置は2段目、3段目がきちんと直角で対称となる位置に穿孔されている。下のスカシは内側をナデにより面取り。タガは偏平でくずれた台形又はくずれた三角形となる。 内面は底部がナナメナデ、以上の部分はナナメハケメ。	細砂を多量に含み、内外、断面共に明るく茶味のある灰色。	1.3	内堀内出土。
8	"	1と同様の形態と思われるが、上から2本目のタガの下方部分以下を欠く。口縁部は焼成によるものか、梢円形に大きく歪み、正円形とした場合には直径約28cm前後と思われる。タガはごく偏平でくずれた「M」字形、粘土不足に加えナデシケが不十分で、粗雑な仕上り、スカシは穿孔後部分的にユビオサエ。内面はナナメ及びヨコハケメで、部分的にユビオサエ。	細砂を多量に含み、灰褐色を基調とする。 堅緻に焼けしまる。	1.4	内堀内出土。
9	"	1と同様の形態と思われる。内面はナナメハケメの後部分的にタガにナデ。ユビオサエ残る。タガはくずれた台形。	白色の細砂を多量に含む。明るい黄灰~灰茶褐色。堅緻に焼けしまる。	1.6	中位以下を欠く。 内堀内出土。

第2表 出土遺物観察表(1)

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	^ケメ (10本/cm)	備考
10	"	1と同様の形態と思われる。タガは低く、くずれた台形。内面はナナメにナゲで仕上げる。上方にナナメハケメ認められる。底面に棒状の圧痕残る。	細砂を多量に含む。明茶褐色を基調とし、断面は黒灰色。部分的にしまりを欠く。	1.7	内堀内出土。
11	"	口縁部は短く外方に屈曲し、ごくわずかに凹む端面を有する。外面口縁部段に焼成前の陰刻がある。タガはくずれた台形。内面はナナメハケメ、オサエを残す部分あり。	小量の小石粒を含む。内外灰茶褐色、断面は暗い茶褐色。焼けしまりを欠く。	1.4	
12	"	中位以下の破片で、1~10とは異なり、最下段(底部段)の幅が広い。外面はタテハケメを基調とし、タガはくずれた、唇を引くような台形。内面はナナメのナゲ、上部はナナメのハケメが認められる。	荒砂を多量に含み、外面は暗~灰褐色、内面は灰褐色を呈し、ザラザラした感触を与える。	1.7	内堀内出土。
13	"	12を一回り大きくした形態と思われる。底部はゆるく弧を描くような断面をしており、内面が厚く太目の作り。タガの断面も同様で、上下に波を打つような部分がある。	荒砂を多量に含み、内外断面共に茶褐色。	1.4	"
14	"	基本的には12と同様の形態で、タガは厚ぼったく鈍い台形。内面はナナメハケメの後、上方部分はタテにナゲを加える部分がある。ニビオサエ痕残る部分あり。	小石粒と多量の荒砂を含み内外断面共茶褐色。焼けしまりを欠く。	外2.0 内2.5 1.5(2種)	内堀内出土。
15	円筒 口縁部	口縁部は外方に短く屈曲し、端面は岐平坦、タガは低い台形。内面ナナメハケメ、スカシの上位にニビオサエ痕が残る。円形のスカシは右回りに穿孔。	細砂、小石粒を含み、褐色を呈する。	2.0~2.2	"
16	"	口縁部の形態は15と同様。タガはくずれた偏平な台形。内面はナナメハケメ、ニビオサエ痕の残る部分あり。器面の調整は比較的丁寧。	白色の細砂を多量に含む。淡い茶褐色を呈し、焼成良好。	1.6~1.9	"
17	"	端部は両端ともわずかに肥厚気味。端面は凹む。外面は左方に傾斜するタテハケメ、内面ナナメないしヨコハケメ、ニビオサエ痕残る。	白色の細砂を多量に含む。赤味のある茶褐色。	1.8	"
18	"	やや厚手の作り。端面わずかに凹む。内面ヨコハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	胎土、色調は16と同様。	1.5~1.9	"
19	"	端部内側がヨコナデで凹み気味。タガは偏平でくずれた「M」字形。	細砂多量に含む。外面赤褐色、内面灰茶褐色。	1.7	内堀内出土。
20	"	端部はゆるく外反するように開き、丸く仕上げる。内面ナナメハケメ。	細砂多量に含む。内外共明るく淡い茶褐色。	1.6	"
21	"	タガはくずれた台形で、仕上げに強くヨコナデされている。内面ナナメハケメ、ニビオサエ痕残る。	細砂多量に含む。内外共赤味のある灰色(還元色)。	1.7	"
22	"	端部は17と同様。タガは偏平でくずれた台形。内面ナナメハケメ、ニビオサエ痕残る。	細砂多量に含む。外面灰茶褐色、内面灰黃褐色。	1.6~1.8	"
23	"	端部はわずかに内反気味、わずかに凹む端面を形成する。タガはごく偏平で、雑な仕上げ。	細砂多量に含む。外面赤褐色、内面は明茶褐色。	1.8~2.2	"
24	"	上から2、3段目にスカシが認められる。外面は左に傾くタテハケメ、内面はナナメハケメが認められるが辨識して不明瞭。タガは偏平でくずれた「M」字形。	細砂を多量に含み、内外共に明るく淡い茶褐色。	1.2	"
25	"	仕上げのヨコナデのため、端部は内反気味に開く。外面左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。	細砂多量に含む。外面淡い茶褐色、内面灰褐色。	外： 1.5 内： 2.1	"
26	"	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、端面はわずかに凹む。	外面赤褐色、内面明灰茶褐色。	1.5~1.7	内堀内出土。
27	"	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、接合痕残	細砂を多量に含み、内外共	1.8~1.9	

第3表 出土遺物観察表(2)

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備考
		る。端部わざかに凹み、外端は丸い。	明るい灰褐色。		
28	"	"	細砂を多量に含み、外側灰黄褐色、内面灰褐色。	1.7	
29	"	端部の仕上げのヨコナデが強く、内外にわざかにふくれる。外側タテハケメ、内面ヨコ及びナナメハケメ。	白色の細砂を多量に含む。内外共淡い茶褐色。	1.7	内堀内出土。
30	"	端部は外方につまむようにヨコナデされる。外側タテハケメ、内面はヨコ及びナナメハケメ。	"	1.6~1.7	"
31	"	外側タテハケメ、内面ヨコ及びナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	細砂を多量に含み、茶味のある灰色(還元色)。	1.7	"
32	"	やや薄い作りで、端部外側は鋭く小さく突出する。外側タテ、内面ヨコ及びナナメハケメ。タガはごく偏平で粗雑な作り。	胎土、色調は29と同様。	1.7~1.9	
33	"	端部は外方に小さく、わざかに屈曲する。外側左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。内面やや磨滅。	外側赤褐色、内面灰茶褐色。	1.7	内堀内出土。
34	"	端部及びハケメは33と略同様。内面にユビオサニ痕あり。タガは偏平でくずれた台形。	細砂多量に含む。外側赤褐色、内面灰褐色。	1.4~1.7	外堀内出土。
35	"	弧を描くように外反し開く。端面は中央がわざかに凹む。外側タテハケメ、内面ナナメハケメ。	白色の砂粒を多量に含む。内外共に灰色。	1.4~1.6	内堀内出土。
36	"	ゆるく外反気味に聞く。	細砂含む。内外暗褐色。	1.6~1.8	"
37	"	端部は32と略同様。	"。内外淡茶褐色。	1.8	
38	"	端部外側は丸い。外側タテ。内面ヨコハケメ。	"	1.8	内堀内出土。
39	"	端部は32と略同様。外側タテ、内面ヨコないしナナメハケメ。	白色の砂粒を多量に含む。外側茶褐色、内面灰褐色。	1.6	"
40	"	37と同様で同一個体かと思われる。	37と同様。	1.6~1.7	"
41	"	端部はわざかに内反気味で、外側は丸い。外側は左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ、ユビオサニ痕を残す。	砂粒多量に含む。内外共淡い茶褐色。	1.5~2.0	"
42	"	端部はごくわざかに外方に屈曲して聞く。外側左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。	砂粒多量に含む。外側赤味のある灰褐色、内面茶褐色。	1.8~2.2	
43	"	端部は30と略同様。	内外共白っぽい茶褐色。	1.7	外堀内出土。
44	"	わざかに端面を突出しが、端部は丸味のある鋭い作り、内面に意識されたものか不明だが沈穂が1条横走る。	細砂を多量に含み、内外共茶味のある茶褐色。	1.5~1.6	内堀内出土。
45	円筒 体部	外側タテハケメ、内面ナナメにナデ(上部にナナメハケメ)。タガは偏平でくずれた台形。上方のタガの上の段及び間の段にスカシあり。内面に接合痕残る。	荒砂及び径5mm程の小石粒を含む。外側は茶灰色、内面は暗黃灰色。	1.4~1.7	"
46	"	外側わざかに左傾するタテハケメ、内面はナナメハケメで接合度を残す。タガはごく偏平な「M」字形。	細砂を多量に含む。内外共明褐色、断面灰褐色。	1.6	
47	"	外側タテハケメ、内面ナナメハケメ及びナナメのナデ。タガは偏平でくずれた台形。	荒砂を含み、灰色。	1.4	
48	"	外側タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平だがしっかりした台形。	荒砂多量に含みしまり欠く。外側灰褐色、内面茶灰色。	1.1	
49	"	中間の段にスカシあり。外側タテハケメ、内面ナナメハケメ。	細砂多量に含み、外側灰茶褐色、内面茶灰色。	1.6	内堀内出土。
50	"	外側左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。	荒砂含み、灰~黄褐色。	1.6	
51	"	比較的薄手で、タガはごく偏平。内面にユビオサニ痕残る。	外側灰褐色、内面赤茶色。硬質に焼き上がる。	2.0	

第4表 出土遺物観察表(3)

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備考
52	"	タガはごく偏平な「M」字形。内面にユビオサエ痕残る。		2.1	内堀内出土。
53	"	タガは偏平でくずれた台形。	細砂含み、灰~灰褐色。	1.5	"
54	"	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	外面灰褐色、内面黄褐色。	1.7	外堀内出土。
55	"	"	外面黄褐色、内面灰色。	1.6	内堀内出土。
56	"	"	細砂含み、明るい茶褐色。	1.8	"
57	"	内面にユビオサエ痕わずかに認められる。タガはくずれた台形で、三角形に近い。	砂粒を多量に含み、外面赤灰褐色、内面灰褐色。	1.4	
58	"	タガはごく偏平。	細砂を多量に含み、灰白色。	1.6	外堀内出土。
59	"	多段凸部の大形品の破片か。器厚が比較的大きく、タガもしっかりした台形。	荒砂多量に含み、外面褐色 内面灰褐色。	1.3	
60	"	底部に近い部分と思われる。タガはごく偏平な台形。	細砂含み、灰~灰褐色。	1.4	外堀内出土。
61	"	タガはやや幅広で偏平な「M」字形。		1.7	内堀内出土。
62	"	タガは偏平で粗雑な作り。	灰色(還元色)で堅緻。	1.6	"
63	"	タガはやくずれた台形。内面にユビオサエ痕残る。	内外灰白色。	1.4	"
64	"	タガは60と同様。		1.6	"
65	"	タガは50と同様。内面にユビオサエ痕残る。	砂粒を含み、内外茶褐色。	"	外堀内出土。
66	"	薄い作りで、タガはごく偏平。	灰褐色。	1.8	内堀内出土。
67	"	タガはくずれた台形。内面にユビオサエ痕残る。	内外灰褐色、断面灰色。	1.7	"
68	"	"	内外黄~灰褐色、断面灰色。	1.6	"
69	"	タガは幅が狭く、上辺がわずかに凹む台形。	茶~赤味のある灰色。	"	"
70	"	タガは偏平でくずれた「M」字形。	砂粒を多く含む。灰白色。	"	"
71	"	タガはごく偏平でくずれた「M」字形。	" 茶褐色。	1.7	"
72	"	タガは67と同様。	内外共に灰色(還元色)。	1.5	
73	"	内面ナナメナナデ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外灰褐色、断面灰色。	1.4	内堀内出土。
74	"	内面ナナメハケメ。タガは角が丸味を持つ。	砂粒を含み、内外茶褐色。	1.4	内堀内出土。
75	"	"、接合痕残す。タガはごく偏平。	"	"	外堀内出土。
76	円筒 底部	1と同形態のものの底部と思われる。外面はタガを接み横に連続するようなタテハケメが認められる。内面はナナメにナナデ。タガは偏平でくずれた「M」字形で部分的に指でおさえられ潰されている。	細砂を多量に含み、外面は灰色(還元色)、内面は茶味のある灰色。	1.3	内堀内出土。
77	"	基部は一様に肥厚する。内面に接合痕残る。	内外灰白色、断面暗灰色。	1.5	"
78	"	基部内面は膨らむように肥厚し、ヨコハケメが認められる。底面に棒状の圧痕あり。	やや赤味のある灰褐色で、還元気体に施成される。	1.4	"
79	"	外面は内溝するように、内面は幅が広がるよう肥厚する。底面に棒状の圧痕あり、外面最下部はタテハケメに先行するヨコハケメが認められる。	内外明茶灰色、断面黒灰色。 外面磨減する。	1.6	"
80	"	外面タテハケメ、内面ナナデ。	内外明茶灰色、断面灰色。	"	"
81	"	"、内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕を残し、底面に棒状の圧痕残る。	細砂多量に含み、黄灰褐色を呈す。	2.1	"
82	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。底面に棒状の圧痕。	外面灰褐色、内面茶灰色。	1.6	"

第5表 出土遺物観察表(4)

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備考
83	"	タガはやや低い位置にあり偏平でくすぐれた「M」字形。基部はやや肥厚する。	赤味のある灰色(還元色)。	"	内縦内出土。
84	"	基部はやや外反気味。内面ナナメハケメ及びナダ。	外面灰褐色、断面灰色。	"	"
85	"	内面最下部は鈍く突出する。内面ナナメハケメ。	内外黄灰色、断面灰色。	1.5	"
86	"	基部はやや外反気味。内面ナナメのナダ。	内外灰褐色、"。	"	"
87	"	内面は裾が広がるように肥厚する。内面ナナメハケナ。	硬質で茶味のある灰色。	2.4	"
88	"	タガはごく偏平な台形。内面ナナメハケメ及びナダ。	茶味のある灰色。	1.4	"
89	円筒埴輪	外面がやや肥厚する基部から、口縁部にかけ略直線的に開く。端部にかけてはゆるく外反気味で、端面はごくわずかに凹む。最下段の幅がタガ間部分の幅より広く、2、3段目に互い直角に、対称位置に円形のスカシが穿孔される。 タガはややくずれを見せる台形。外面タテハケメ、内面はナナメハケメを主体とし口縁付近ではヨコハケメ、部分的にタテ方向に軽いナダを施し、接合痕を各所に残す。底面に棒状の圧痕残す。	荒砂を多量に含み、茶褐色を呈し、比較的均質に良好に焼成されている。	"	口縁部は欠損部分が多い。 以下、186までには後内部調査区出土だが、調査区は全て内縦内。
90	円筒埴輪 体～口縁部	ゆるく内反気味の体部で、口縁部は外方に屈曲し開く。 端面はわずかにふくらみを持つ。上から2、3段目に対称位置、直角方向に円形のスカシを有す。外面タテハケメ、内面は不明瞭なナナメハケメ、部分的にニビオサエ痕を残す。タガはくすぐれた台形。	荒砂を多量に含み、内外共黄褐色のある褐色、断面は茶灰色。焼けしまりを欠き内外磨滅する部分が目立つ。	1.7	
91	"	端部は外方に短く屈曲し、端面は丸味を持つ。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、ニビオサエ痕を残す。タガはくすぐれた台形。	小石粒を多量に含み、茶褐色。	1.7~1.8	
92	"	端部は外方に短く屈曲し、端面は平坦。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、ニビオサエ痕が残る。 タガは下方がつぶれた台形。	荒砂、小石粒含み、褐色。	1.5~1.8	
93	"	"	荒砂、小石粒を多量に含み部分的に茶味のある灰色。	1.4	
94	"	端部は外方に屈曲し、端面は磨滅して丸味を帯びる。タガはくすぐれた台形。内面にニビオサエ痕残る。	荒砂を多量に含み、黄褐色しまりを欠きもろい。	1.7~1.9	
95	円筒 口縁部	外面左傾するタテハケメ、内面ナナメないしヨコハケメ。突頭は平坦。タガは偏平な台形。	砂粒を多量に含み、茶褐色。	1.6	
96	"	端部はわずかに外方に屈曲気味で、端面内側はやや突出気味。	細砂を多量に含み、部分的に赤味のある灰褐色。	1.7	
97	"	端部は外反気味で、端面は平坦。	荒砂を多く含み、明褐色。	1.5~1.6	
98	"	内面端部直下はヨコナダのためわずかに凹む。	細砂多く含み、暗茶褐色。	1.6~1.9	
99	"	端面は平坦で、両端はわずかに丸味を持っている。	小石粒を含み、暗褐色。	1.6~1.7	
100	"	"	細砂を多く含み、明褐色。	1.8	
101	"	"	"	1.5~1.6	
102	"	"	小石粒を含み、赤褐色。	1.3~1.4	
103	"	"	細砂を多く含み、淡茶褐色。	1.5	
104	"	端部直下は薄い作り。端面はわずかにふくらむ。	細砂、小石粒含み、褐色。	"	

第6表 出土遺物観察表(5)

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備考
105	"	端部は外方に屈曲して開き端面に平坦。内面ナナメハケメで斜走る沈線あり。	砂粒を多く含み、明茶褐色。	1.8	
106	"	端面は両端が丸く、中央がわずかに溝状に凹む。	細砂を多量に含み、褐色。	1.6, 3.3	
107	"	端面はわずかに凹み、両端は丸い。	小石粒を含み、暗茶褐色。	1.7	
108	"	"	" 暗褐色。	1.3~1.5	
109	"	端面はわずかにふくらみがある。	外面明褐色、内面灰褐色。	"	
110	"	"	小石粒を含み、明茶褐色。	1.3	
111	"	外反気味に開き、端面はわずかに凹む。厚手の作り。	細砂を含み、褐色。	1.7~1.9	
112	朝顔形円筒 口縁部	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。器厚が大きく、大型品であろう。	砂粒、小石粒を含み、内外茶褐色、断面暗褐色。	2.0	
113	円筒 体部	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、ユビオサニ痕を残す。タガは下方がくずれて低い台形で三角形に近い部分もある。円形のスカシ有り。	荒砂を含み、淡い灰褐色。	1.7~1.8	
114	"	外面タテハケメ、内面は上位がナナメハケメ、下位ナナメのナデ。タガは裾広がりの台形。	荒砂、小石粒を多量に含み褐色を呈する。	1.5~1.8	
115	"	外面タテハケメ、内面は上部にナナメハケメが認められる他、ナナメにナデ。タガはくずれた台形。	荒砂を多量に含み、褐色。	1.6	
116	"	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ及びナデ。タガは鉢さはあるが、幅が広く、しっかりとしめた「M」字形。タガ直下に方形と思われるスカシあり。	内外明灰褐色、断面は黄灰色。荒砂、小石粒を含み焼成堅穢。	1.3	
117	"	外面タテハケメ、内面ナナメにナデ。タガは三角形。	荒砂、小石粒含み、明褐色。	2.0	
118	"	外面左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	荒砂を多量に含み、しまりを欠く、濃い茶褐色。	2.1	
119	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはくずれた台形。	荒砂含む。赤味のある灰色。	2.0	
120	"	外面タテハケメ、内面は不明瞭だがハケメあり、タガはごく偏平。	荒砂を含み、しまりを欠く。明灰褐色。	1.8	
121	"	外面左傾するタテハケメ、内面ナデ。タガはごく偏平な台形。	荒砂、小石粒を含み、灰褐色。	1.6	
122	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはくずれた台形。	荒砂多く含み、茶褐色。	1.5~1.9	
123	"	"	荒砂を含み、濃い茶褐色。	1.6~1.8	
124	"	"	明茶褐色。しまりを欠く。	1.5~1.7	
125	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平。	淡い灰褐色。	1.9	
126	"	口縁部に近い部分の破片。外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは台形と三角形の中間的な形態。外面磨滅。	荒砂と小石粒を含み、もろい。内外明茶褐色。	2.0	
127	"	内面ナナメハケメ、粗雑な成形。タガはやや幅広で上辺がわずかに凹む台形。	荒砂、小石粒を含み、明るい茶褐色。	2.1~2.3	
128	"	内面ユビオサニ痕残る。タガは丸味のある台形。	砂粒を含み、茶褐色。	1.9	
129	"	タガは127と同様。	荒砂、小石粒含み、灰褐色。	1.9~2.1	
130	"	スカシは内側をナデにより面取り。タガは偏平な台形。	砂粒を含み、淡赤灰色。	1.8, 2.3	

第7表 出土遺物観察表(6)

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎、色調、焼成、等土の特徴	ヘーケル (10本/cm)	備考
131	"	スカシ内面はナデで仕上げる。タガはくずれた台形。	荒砂を含み、淡茶灰色。	1.9、2.4	
132	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平。	濃い茶褐色。	2.0	
133	"	内面ナナメハケメ。タガは偏平でくずれた台形。	荒砂含む。淡い茶褐色。	1.5~1.7	
134	"	内面ナナメのナデ。"	"。茶褐色。	1.7	
135	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平。	砂粒含み、淡い茶灰色。	1.7	
136	"	薄い作りでタガは偏平な台形。	砂粒含み、淡い赤褐色。	1.4	
137	"	内面タテのナデ及びナナメハケメ。	荒砂、小石粒含み、褐色。	1.5	
138	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	灰色味のある茶褐色。	1.6~1.7	
139	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは台形がくずれて三角形との中間的な形態。スカシ内側はナデで面取。	荒砂を含み、淡茶褐色(還元色)。	1.7	
140	"	外面タテ、内面ナナメハケメ及びタテのナデ。	荒砂含み、黄褐色。	2.0、2.7	
141	"	外面タテ、内面ナデ及びナナメハケメ。	荒砂多量に含み、茶褐色。	1.5	
142	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはくずれた台形。	荒砂含み、灰色(還元色)。	"	
143	"	"	"、明褐色。	"	
144	"	"	"、明茶褐色。	1.9	
145	"	外面タテ、内面ヨコハケメ。タガは偏平な「M」字形。	細砂含み、灰褐色。	1.8~2.0	
146	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	荒砂含み、明灰褐色。	1.4	
147	"	"	"、淡赤褐色。	2.0、3.1	
148	"	やや厚手。タガはくずれを見せる台形。	荒砂、小石粒含み、明褐色。	1.7	
149	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	灰茶褐色。	1.6~1.8	
150	"	"	荒砂含み、淡い茶褐色。	1.4	
151	"	"	"、茶褐色。	1.5~1.7	
152	"	"	茶味のある灰色。	1.5~1.8	
153	"	外面タテ、内面ナナメハケメ、ニビオサニ痕残る。タガはくずれて、台形と三角形の中間的な形態。	荒砂含み、淡茶灰色。	1.5	
154	"	外面タテ、内面ナナメハケメ、ニビオサニ痕残る。	荒砂含み、茶褐色。	1.6	
155	"	タガは偏平でくずれた台形。	"	1.6~1.7	
156	"	外面は浅いタテハケメ、内面ナデ。タガはしっかりとした「M」字形。	荒砂を含み、黄色味を帯びた白色。		
157	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはくずれた台形。	荒砂含み、外面は淡黄褐色 内面は淡茶灰色。	1.8	
158	"	内面タテにナデ。タガは偏平な台形。	砂粒含み、茶褐色。	"	
159	"	156と同一個体かと思われる。タガは幅広で上辺がわずかに凹む台形で、しっかりとしたり。	156と同様		
160	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	砂粒多く含み、淡黄灰色。	1.9、2.5	

第8表 出土遺物観察表(7)

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備考
161	"	外面タテ、内面ヨコハケメ。タガはくずれた台形。	"、灰茶褐色。	1.4	
162	"	内面ナナメハケメ及びタテのナデ。	砂粒多く含み、茶褐色。	1.6	
163	"	内面ナナメハケメ及びナデ。タガはくずれた台形。	茶褐色。	1.4	
164	"	タガはくずれて、台形と三角形の中間的形態。	外面灰褐色、内面茶褐色。	1.3~1.5	
165	"	内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	砂粒多量に含み、黄褐色。	1.5~1.8	
166	円筒 底部	内湾気味に立上がる。外面タテ、内面ナナメハケメ。	"、明褐色。	1.4~1.8	
167	"	外面タテハケメ、内面タテのナデ。	"、褐色。	2.0、2.8	
168	"	基部は肥厚し、底面に棒状の圧痕。内面ナナメハケメ及びナデ。	白石の砂粒を多量に含み、内外灰色(還元色)。	1.7	
169	"	内面最下部は鋭く突出する。内面ナナメのナデ。	砂粒、小石粒含み、茶褐色。	"	
170	"	薄手の作りで、内面ナナメ及びヨコハケメ。	白色の荒砂含み、灰色。	"	
171	"	底面に棒状の圧痕顯著。	"、灰褐色。	"	
172	"	基部は一様に肥厚する。内面ナナメのナデ。	明褐色。	"	
173	"	裾が広がるように肥厚する。内面ナナメハケメ。	白色の砂粒含み、茶褐色。	2.1	
174	"	最下部は器厚を減じる。内面タテのナデ。タガはごく偏平な「M」字形。	荒砂、小石粒含み、灰色味のある褐色。	2.0	
175	"	外面最下部は福広がりに肥厚。内面ナナメのナデ。	荒砂多く含み、淡灰褐色。	1.7	
176	"	最下部上方が肥厚。内面ナナメハケメ及びナデ。	黄灰色を呈し、堅緻。	1.6	
177	"	外面タテ、内面ナナメハケメ。底面に棒状の圧痕。	黄灰色。	0.9	
178	"	最下部は外方に小さく突出気味。内面タテにナデ。	小石粒を少量含み、茶褐色。	1.7	
179	"	外面最下部は鋭く外方に突出する。内面は最下部がヨコにナデ。以上の部分はナナメハケメ及びナデ。	荒砂多量に含み、茶褐色。	1.5	
180	"	内面最下部は三角形に突出する。内面はナナメ及びヨコにナデ。	荒砂、小石粒を多量に含む。しまりを欠き、褐色。	1.9	
181	"	外面最下位に粗いヨコハケメが認められる。内面はナナメにナデ。	淡い黄褐色。	2.0	
182	"	最下部内外共外方に小さく突出する。内面はナデ。	砂粒多量に含み、褐色。	1.6	
183	"	基部は一様に肥厚。内面ナナメにナデ。	"	1.5	
184	"	内面はナナメのナデ。	外面黄灰色、内面灰色。	"	
185	"	外面最下部は小さく外方に突出。内面はナナメのナデ。底面に棒状の圧痕あり。	砂粒、小石粒含み、淡褐色。		
186	"	内面最下位は三角形に突出する。内面はナナメにナデ。底面に棒状の圧痕あり。	荒砂多量に含む。しまりを欠き、褐色。	1.8	
187	大刀形埴輪	いずれも勾金の部分で、187には三輪玉が2個接合した。他にも4個所脱落痕がある。188、189も勾金の柄頭側の先端部分で、188の突起状の部分に三輪玉を表現したものと思われるが、かなり退化した表現である。	187は暗茶褐色を呈し、もう1つは黄褐色で小石粒を含む。189は灰褐色。	—	図示したものは全て後円部東側調査区出土。
188					
189					
190	笠形埴輪	笠頂部に付けられる箇の部分の破片。190は付根付近で、外方部分にハケメが認められる。	190、191共同様で、荒砂、小石粒を含み、ややもろく	—	"
191					

第9表 出土遺物観察表(8)

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成、等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備考
192	形象埴輪	191は飾りの先端部分と思われる。	明褐色。	—	
193	須恵器	大刀の柄頭かと思われる。	187と同様。	—	
194		いずれも要の体部破片で、200はやや小型品かと思われる。200は釉が付着して判然としないが、外面はいずれも平行タタキ目、内面は同心円タタキ目が残る。	いずれも荒砂を少量含み、内外青灰～灰色を呈するが、断面セピア色となるもの(196、197、200)もある。200がやや焼けしまりを欠く他はいずれも堅緻。		193～195、197、198、200は後円部東調査区出土。
200					

第10表 出土遺物観察表(9)

V まとめ

愛宕山古墳の前方部南側、後円部東側、両調査区での成果は前章に述べたとおりである。本章ではこれを総括し、若干の考察を加えるとともに、今後の課題についても述べ、まとめとしていたい。

周堀について

調査の主な目的は、周堀の具体的な状況を明らかにすることにあったが、前方部南側調査区では、周堀が二重であることが確認され、さらに後円部東側調査区では、隣接して行田市遺跡調査会が実施した市道域の調査成果^(註1)と併せ考えると、それが長方形の平面形態を有するものであることが判明した。各部分の概要は以下のとおりである。

内堀は前方部前面の比較的遺存の良好な部分の堀底で幅約六・二尺、検出面で約七・六尺である。東南コーナー東側面部は立上がりが破損しているが、ほぼ同様な数値が予想される。後円部東側調査区では墳丘側立上り部分の遺存は良くないが、中堤と後円部との最も幅の狭くなる堀底部分の幅は約五尺となる。

墳丘主軸長を確認するため、後円部背後に設定したトレンチ内でも内堀の立上りは、後世の溝により破壊されているものと思われ、確認されなかつたが墳丘主軸長五三尺という数値はさほど変更は要しないと思われる。

中堤の幅は前方部南側調査区内の前方部前面基部で約六・七尺、検出面で五・六尺で、東側面部では基部で五・一・六・二尺、検出面で四・〇・四・八尺であった。

外堀は、前方部南側調査区の東側面部では、古い時期の溝を壞して開削

され、幅は全体で正確に把握できなかつたが、調査区中央部の断面観察では、堀底で約一・九尺、検出面で約三・二尺であり、前方部前面部分では、調査区内で外方立上りが明確に検出できず、側面部より広くなる可能性がある。

不確定要素もあるが、以上の数値から、周堀の全長（主軸長）は八十多尺と推定され、また、深さについては、遺構検出面から、内堀で五〇・七〇尺（注2）、外堀では四五・七〇（注3）の範囲にあり、標高は一六・九・一七・〇尺（注4）の範囲内の部分が多く、珪藻分析の結果からは、開削当初、水をわずかに湛えるような湿地的環境にあったことが予想されるものであった。

埼玉古墳群の前方後円墳については、稻荷山古墳、二子山古墳、鉄砲山古墳が長方形の二重周堀を有することが判明、又はほぼ確実視されているところである。かつて、埼玉古墳群中の小型前方後円墳は盾形の周堀を有するものという想定がなされ、愛宕山古墳の周堀もそうした形態と考えられていてが、今回の調査により長方形かつ二重周堀であることが明らかとなつて、他の小形前方後円墳の周堀の形態の推定にも再考を迫るものである。

さて、こうした前方後円墳で長方形周堀を有する例としては、千葉県芝山町駿塚古墳が最初の調査例であり、その希少性に注目した市毛歎氏による考察があるが、確実な例としては、千葉、埼玉兩県で発見されているのみである。推定を含めても全国で十例前後であることは別に述べたところである。^(註5) 前方後円墳の長方形周堀については類例も少なく、その系譜等について議論できる現状ではないが、後期古墳群としては、大規模な前方後円墳が群集するという点で全国的にみても異色な古墳群である埼玉古墳群のその前方後円

境の多くに、採用されているという点で、その形態に政治的意義が付加されている可能性も考えられるのである。

その他の遺構について

両調査区で発見された、周堀以外の遺構は、溝、井戸、土壙があつたが、この中で、周堀の開削以前と判断されるものに溝、SD005があつたが、覆土の状況から、開削時にはすでに埋没していたものであるが、その性格は不明である。

この他、開削時と極めて近い時期と判断されるSD001～003の3基の溝がある。前方部前面の周堀底の墳丘寄り、及び中堤寄りで発見された小規模なものであるが、覆土は周堀のそれと全く同じであり、周堀の埋没が始まるとときにはすでに存在したものである。こうした溝は鉢塚古墳の後円部東側部分の調査でも内堀底の中央や、墳丘際からも発見されており^(註9)、その走行方向から周堀の開削と何らかの係りを有する可能性を有するものである。

埴輪について

出土した遺物のうち、最も多かったのは埴輪片であり、とりわけ、その大部分は円筒埴輪であった。

出土状況をみると、前方部南側調査区では内堀内からが多く、特に南部のヨーナー付近では中堤寄りの出土が目立った。後円部東側調査区では、調査区東壁寄りでの出土が目立つたが、こうした状況は隣接する行田市遺跡調査会の発掘調査区内での遺構のありかたから、中堀上に樹立されていたものが破損、転落したことが明らかであった。

円筒埴輪はいずれも破片となつて出土したが、その中で完形又は全体の様子がわかる程度に復元できたものも数個体あった。これらについてはA～C

類の、板略三形式に分類したが、A、B類は三本凸帯の四段構成で、C類は

全容は不明だが、多段構成の大型品と思われるものであった。

円筒埴輪の全体的な特徴としては、外面の調整は全てタテハケメであり、

ヨコハケメの施されたものは見当らない。底部には押圧、ケズリ等を施されたものはなく、底面には禾本科植物の茎と思われる棒状の压痕のあるもののが多かった。焼成については、認めうる限りでは、明確な黒斑を有するものはなく、登窯により焼成されていると思われ、中には還元色を呈するものもあつた。スカシについては、A、B類は基本的に円形だが、その穿孔のしかたの粗細さゆえに、横円形等にくずれをみせるものもある。これに対し、C類は出土点数目極めて少ないが、方形のスカシが認められるものがあつた。

タガはA類に偏平な「M」字形を呈するもの(A類)と偏平な台形を呈するもの(A₂類)とがあり、B類はいずれも偏平な台形であり、C類はややくずれを見せるが、A、B類と比較すると幅が広目で、高さもやや高い台形である。^(註10)以上のように、円筒埴輪については川西編年V期に該当するものである。

主體となるA、B類は三本凸帯の四段構成であり、埼玉古墳群中では同様の形態のものは現在のところ確實な発見例がない。周辺地区の古墳では、熊谷

市鎧塚古墳、女塚一号墳から、A類に類する円筒埴輪が出土している。鎧塚古墳の三本凸帯四段構成品は器高、口幅・底径等、A類に近い數値を有するが、女塚一号墳のものはこれよりも一回り大型のものである。愛宕山古墳のものと比較すると、タガはあまりくずれを見せず、比較的突出度のある台形を呈し、スカシについても半円形のものを散見し、先行する要素が強いものである。鎧塚古墳及び女塚一号墳の建造年代については、共伴する須恵器、及び土器から、两者共五世紀末から六世紀初頭頃と考えられる。

また、吹上町袋・台遺跡一号墳からはB類より小型で、タガが偏平な「M」字形という相異があるが、B類と同様のプロボーションと思われる円筒埴輪が出土している。袋・台遺跡一号墳は共伴する土師器から六世紀前半と考えられるものである。

C類については出土点数は極めて少ないが、方形のスカシを有する、多段凸帯の大形品と思われ、埼玉古墳群中では二子山古墳^(註14)の出土品の中に、タガ、スカシの形状の酷似するものがある。二子山古墳は六世紀第二四半期を前後する頃の墓造と考えられる。

愛宕山古墳の円筒埴輪の年代は以上、決して十分とはいえないが、周辺の古墳及び埼玉古墳群内の古墳出土品との検討により、六世紀前半中葉頃の所産と考えておきたい。本古墳の円筒埴輪については、「一時期の所産」と考える^(註15)が、詳しい年代的位置付けとともに、類例の增加を待つて検討してゆきたい。

円筒埴輪に比較すると、量的に非常に少なかつたが、形象埴輪で種別の判明したものがあった。器形埴輪では、蓋、大刀、が確認できた。蓋形埴輪については、かなり退化した形態と思われるが、関東地方では群馬県赤堀茶臼山古墳や県内の鴻巣市生出塚遺跡からの出土が知られている位であり、非白山古墳や家形埴輪や動物形埴輪も発見された。

埴輪の器種別の出土状況を検討すると、円筒埴輪についてはA類が前方部南側調査区で多数を占め、後円部東側調査区ではB類が大部分であった。形象埴輪についても多くの後円部東側調査区からの出土である。出土した埴輪は多く中堤上に樹立されていたと思われるものであったが、中堤上に樹立痕

は残されていなかったものの、前方部寄りの部分にはA類の円筒埴輪が、後円部寄りの部分にはB類及び形象埴輪が主体となっていたことを予想させる。

以上のように、今回の調査で愛宕山古墳の周囲の形態と埴輪について新たな見出しが得られ、その内容は極めて重要な内容を含むものであった。愛宕山古墳の墓造年代については、東方に隣接して所在する古墳群中の盟主墳である二子山古墳と相前後する時期が推定されるが、当時の古墳群の最高首長とな思われる二子山古墳の被葬者の従属的位置にある者の墳墓としての位置付けが許されるであろう。

(杉崎茂樹)

- 註 1 「埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和五六年度」 埼玉県教育委員会 昭和五八年三月
註 2 柳田敬司、他 「埼玉縣荷山古墳」 埼玉県教育委員会 昭和五五年一月
註 3 萩原文藏、他 「天王山・梅原古墳他周縛発掘調査概要」 「資料館報」 6 県立さきたま資料館 昭和五〇年
註 4 杉崎茂樹、他 「鉢碗山古墳」 埼玉県教育委員会 昭和六〇年三月
註 5 「文獻 第5回」 古墳群模式図
註 6 流口宏、他 「はにわ」 日本経済新聞社 昭和三八年七月
註 7 市毛照 「前方後円墳における長方形周溝について」 「古代学研究」 第七一号
註 8 古代学研究会 昭和四九年三月
註 9 カ 川西宏幸 「円筒埴輪総論」 「考古学雑誌 第六四卷 第二号」 日本書古学
註 10 川西宏幸 「円筒埴輪総論」 「考古学雑誌 第六四卷 第二号」 日本書古学
註 11 川西宏幸 「鐵塚古墳」 鶴谷市教育委員会 昭和五六年三月
註 12 寺社下博 「鐵塚古墳」 鶴谷市教育委員会 昭和五六年三月
註 13 田部井功、他 「袋・台遺跡」 吹上町教育委員会 昭和五七年三月
註 14 杉崎茂樹、「二子山古墳の埴輪および須恵器」 「資料館報」 14 県立さきたま資料館
註 15 若松良一 「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」 「法政考古学」 第七集
註 16 法政考古学会 昭和五七年三月
註 17 後藤守一 「上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」 帝室博物館 昭和八年三月
註 18 第一五号、二〇号埴輪墓跡から出土例がある。鴻巣市教育委員会山崎武氏御教示。

図

版



愛宕山古墳の埼玉古墳群内の位置（昭和57年3月撮影）



1 愛宕山古墳近景（北西から）



2 南方部南側調査区内堀及び中堤（南から）

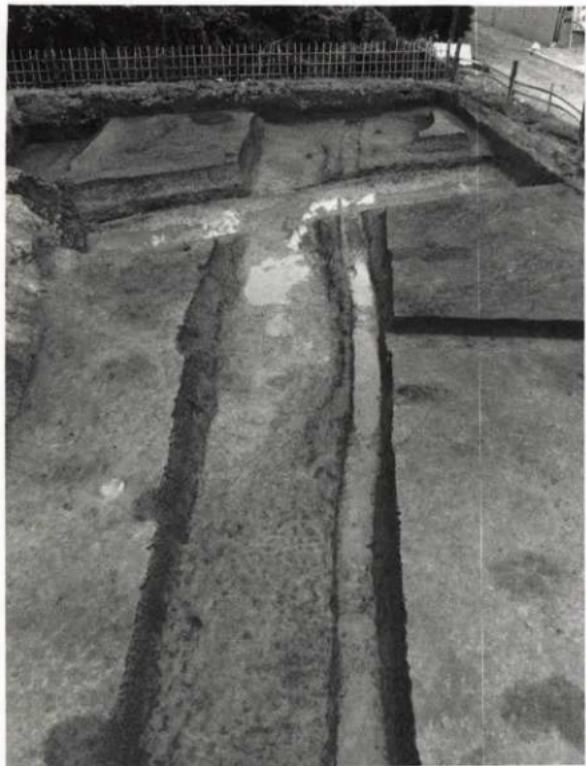


1 前方部南側調査区 内堀 (南東から)



2 同上調査区 中堤 (南から)

1 前方部南側調査区
外 堀（南西から）



2 同 上 (東から)





1 前方部南側調査区遺物出土状況（内堀内）



2 同 上



1 前方部南側調査区遺物出土状況（内堀内）



2 同 上



1 前方部南側調査区遺物出土状況（内堀内）



2 後円部東側調査区 全景（内堀）



1 後円部東側調査区遺物出土状況（内堀内）



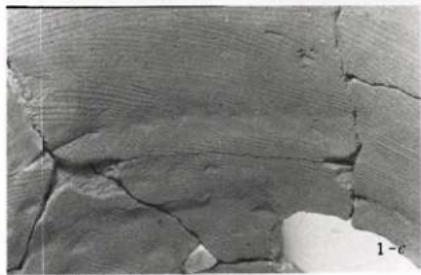
2 同 上



1



1-a
1-b



1-c

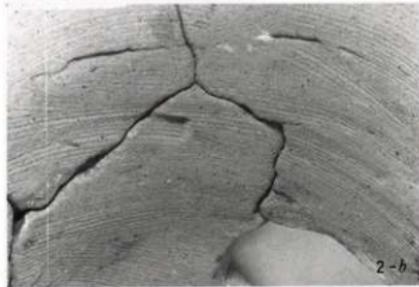
1 前方部南側調査区出土遺物 1 (1, a: スカシ～口縁部, b: 基底部～第2段, c: 内面)



2

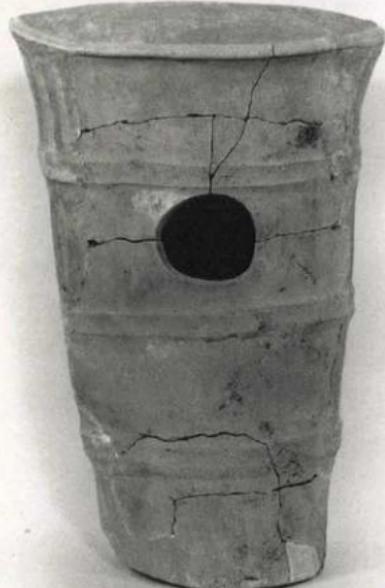


2-a



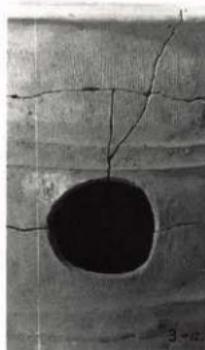
2-b

2 同 上 2 (2, a: スカシ～口縁部, b: 内面)



1 前方部南側調査区出土遺物 3 (3, a:スカシ～口縁部, b:基底部～第2段 c:内面)

3

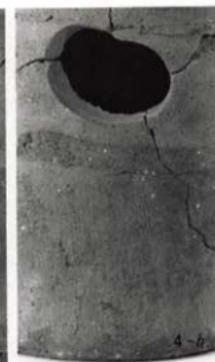


3-c



2 同 上

4



4-b



4-c

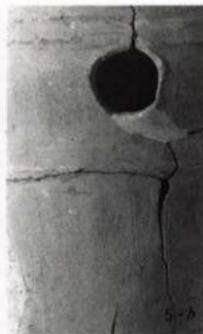
4 (4, a:第3段～口縁部 b:基底部～第2段 c:内面)



5



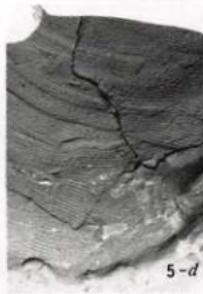
5-a



5-b



c



d

1 前方部南側調査区出土遺物 5 (5, a : 第3段～口縁部 b : 基底部～第2段 c : 口縁部内面 d : 基底部内面)



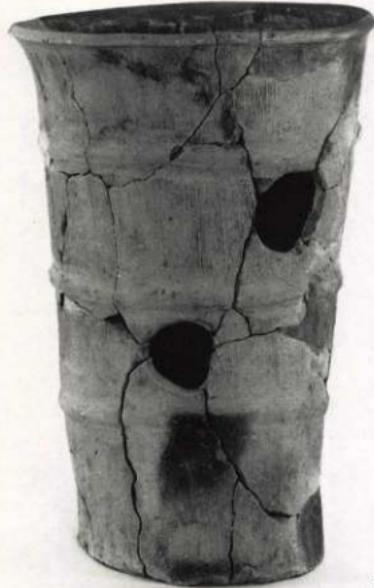
6



6-a

2 同 上

6 (6, a : 体部中位～口縁部)



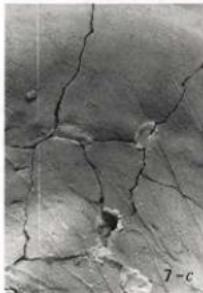
7



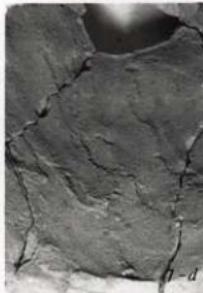
7-a



7-b



7-c



7-d

1 前方部南側調査区出土遺物 7(7, a: 第3段～口縁部 b: 基底部～第2段 c: 口縁部内面 d: 基底部内面)

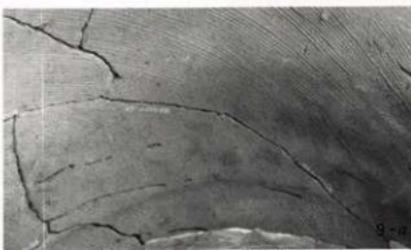


8

2 同 上 8(8)



9



9-a

3 同 左 9(9, a: 口縁部内面)



11

1 前方部南側調査区出土遺物 10 (11, a : 外面窪印)



11-a



10

2 同 左 11 (10)



12

3 同 上 12 (12, a : 内面)



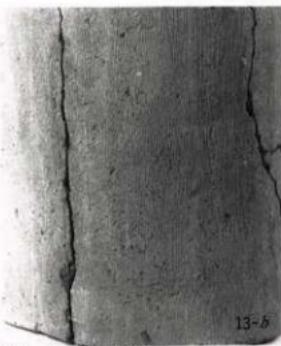
12-a



13



13-a

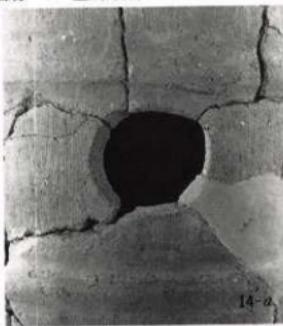


13-b

1 前方部調査区出土遺物 13 (13, a: タガ, スカシ部分 b: 基底部段)



14



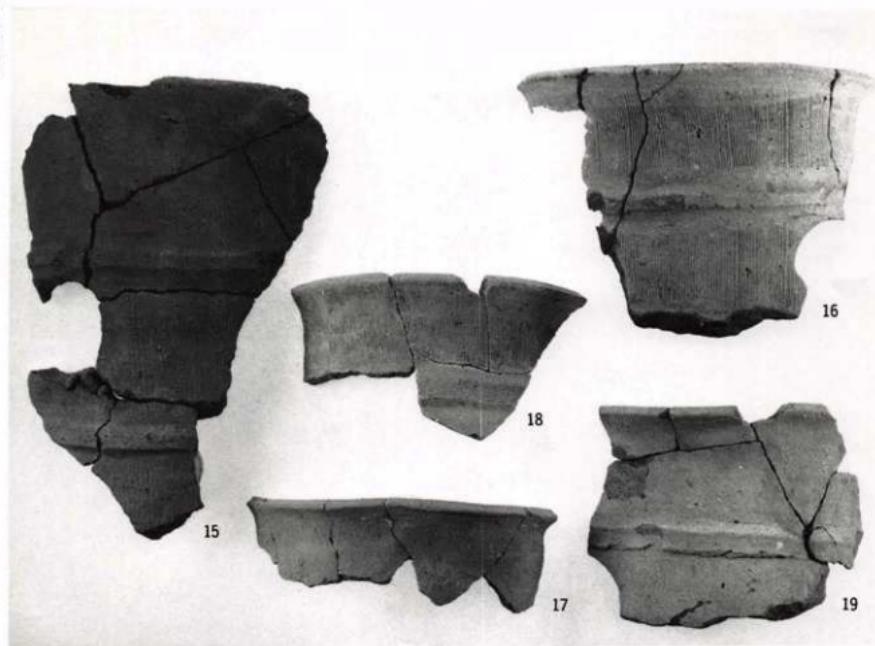
14-a



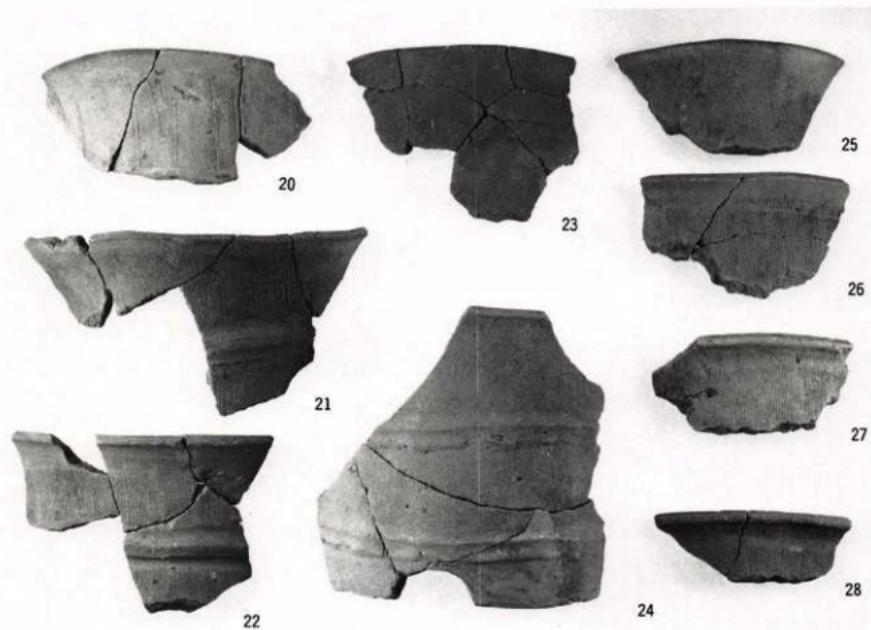
14-b

2 同 上

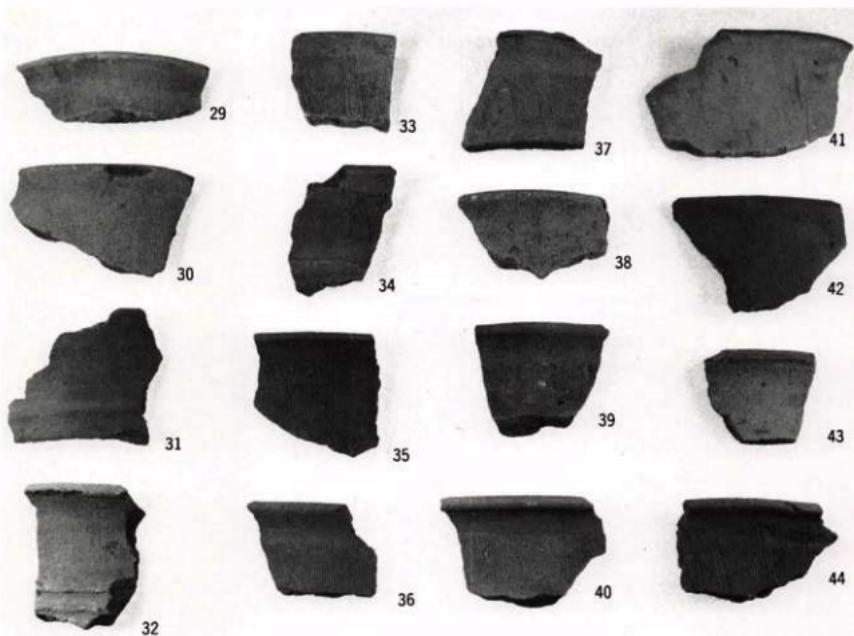
14 (14, a: タガ, スカシ部分 b: 内面)



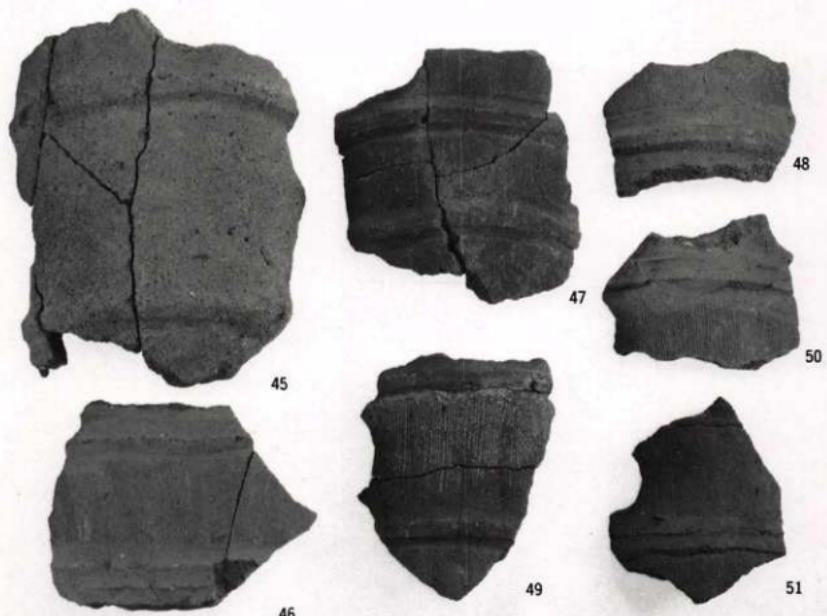
1 前方部南側調査区出土遺物 15 (15~19)



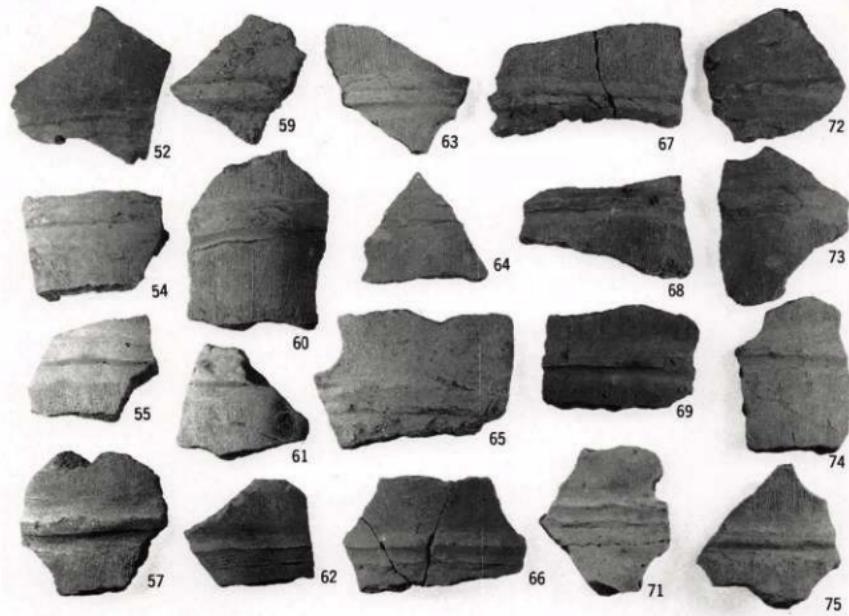
2 同 上 16 (20~28)



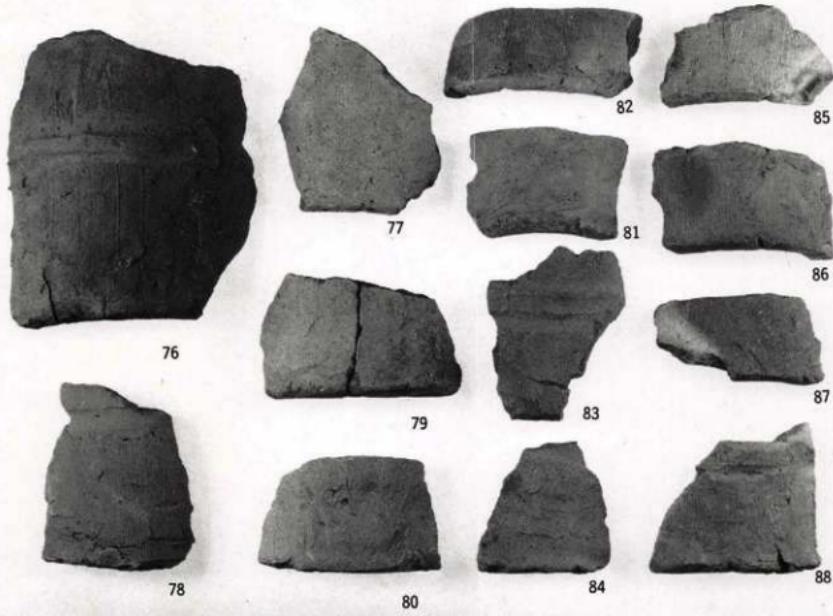
1 前方部南側調査区出土遺物 17 (29~44)



2 同 上 18 (45~51)



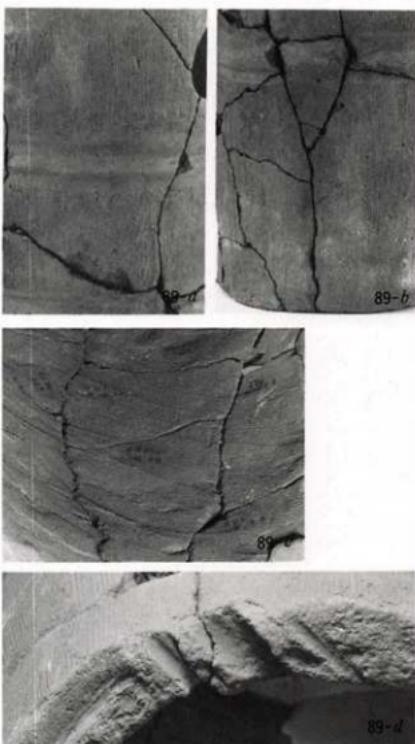
1 前方部南側調査区出土遺物 19 (52~75)



2 同 上



89



89-a

89-b

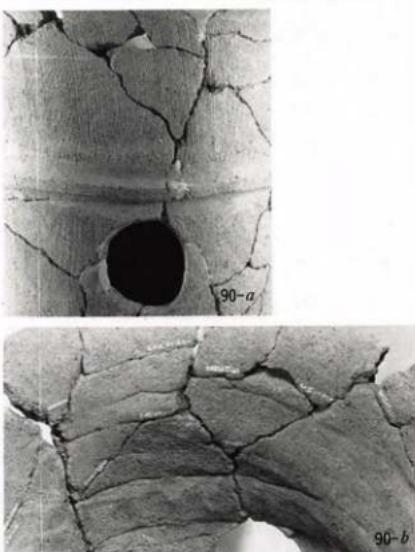
89-d

90-b

1 後円部東側調査区出土遺物 21 (89, a: 第2, 3段 b: 基底部～第2段 c: 基底部内面 d: 底面)



90



90-a

2 後円部東側調査区出土遺物 22 (90, a: スカシ～口縁部 b: 内面)



92



91



112



93



94



95



96



98



99



100



105



103



102



106



107



104



97



101



109



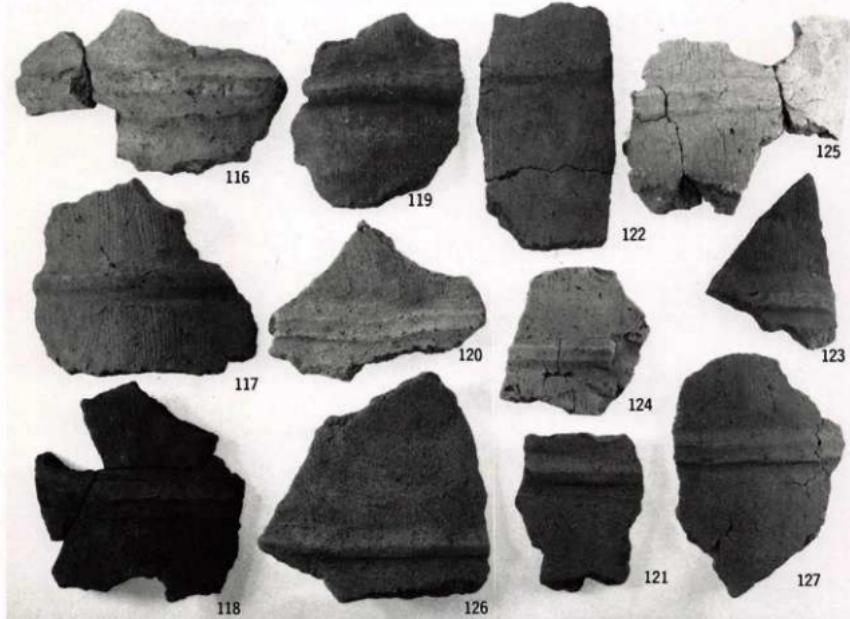
111



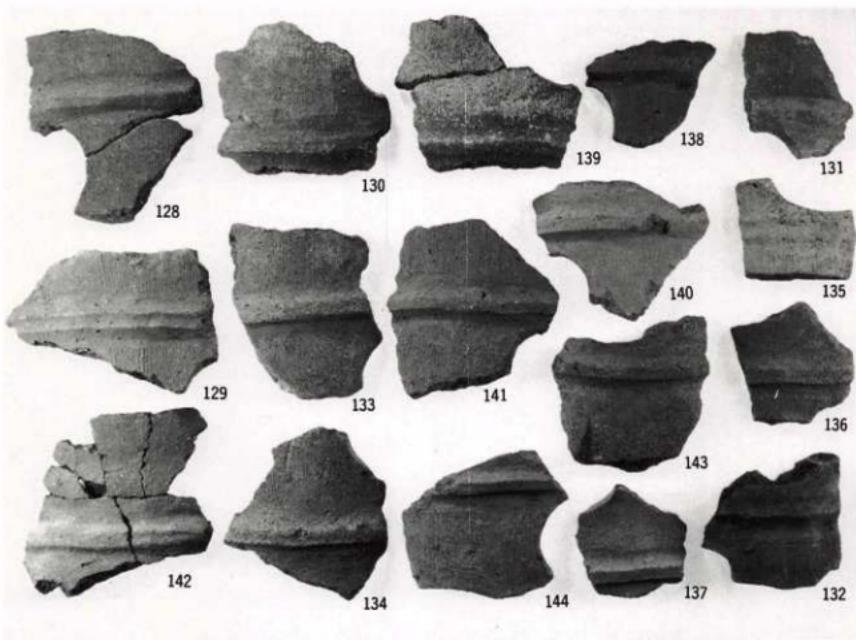
108



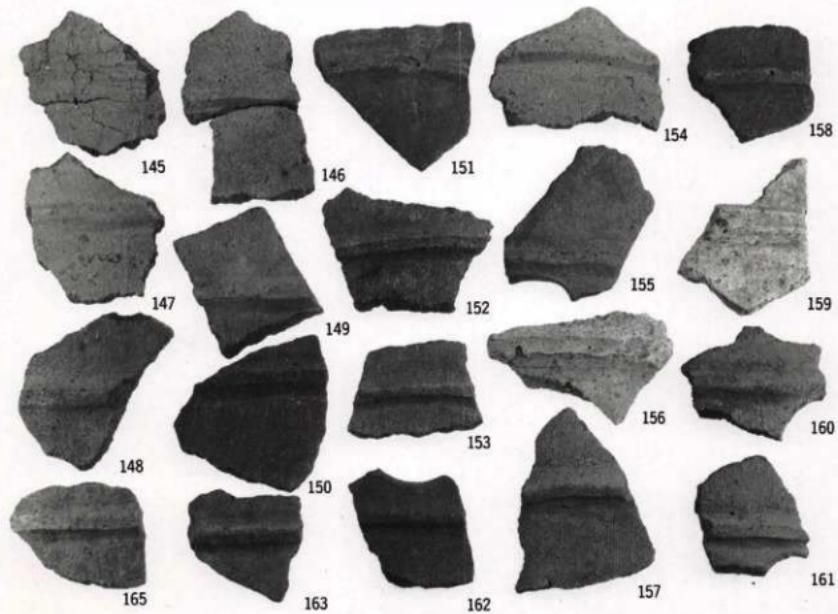
1 後内部東側調査区出土遺物 24 (113~115)



2 同 上 25 (116~127)

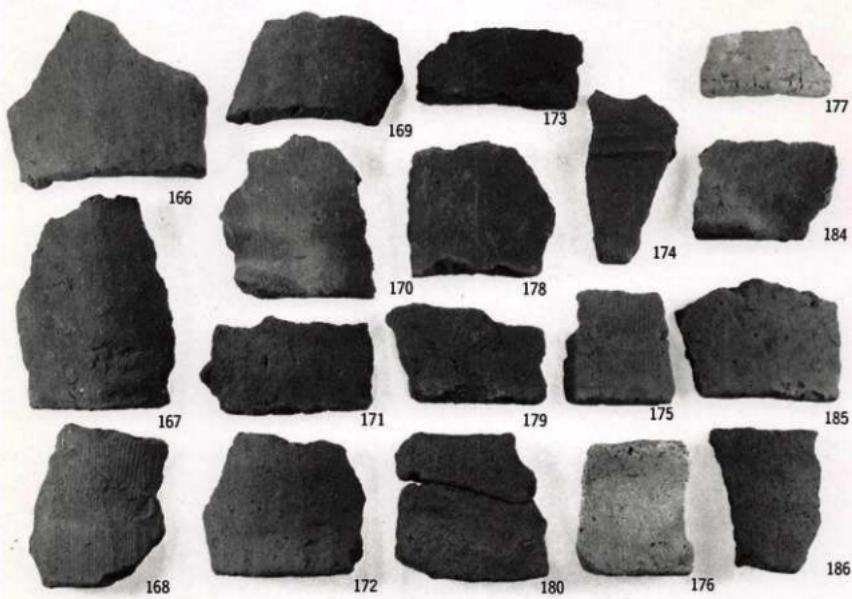


1 後内部東側調査区出土遺物 26 (128~144)

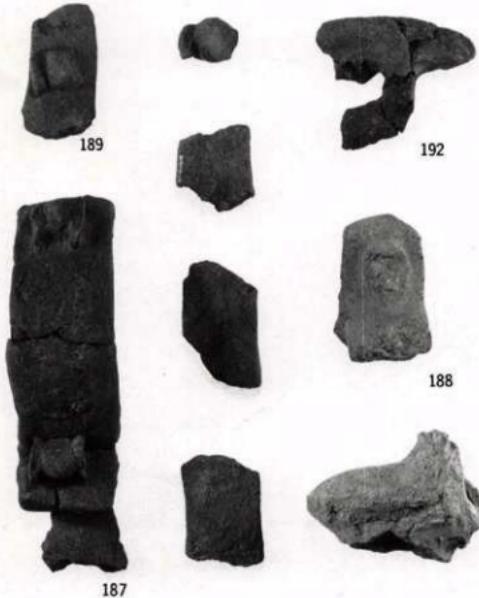


2 同 上

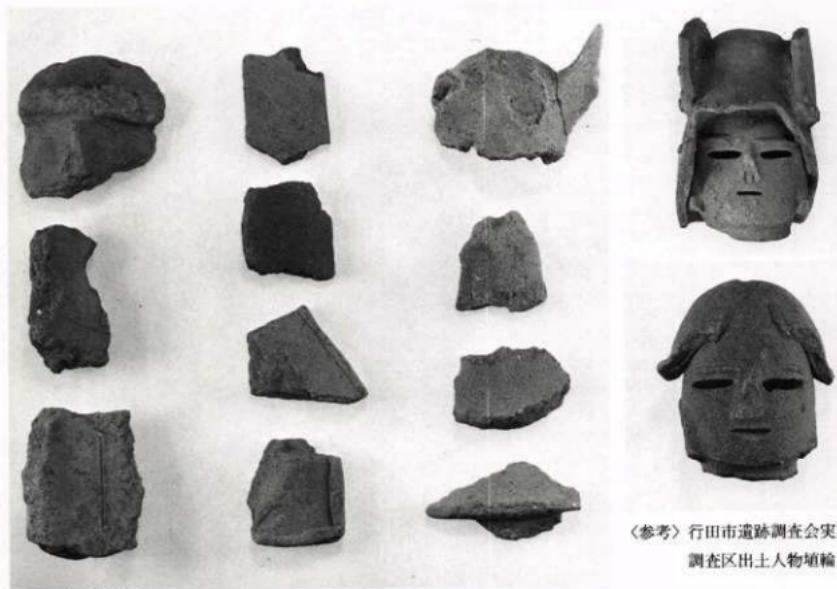
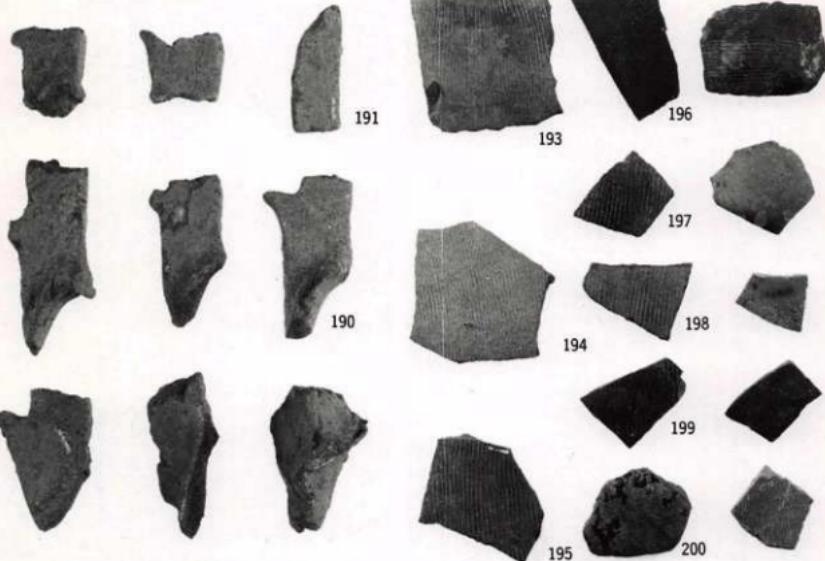
27 (145~165)



1 後部東側調査区出土遺物 28 (166~186)



2 形象埴輪 1 (187~189, 192)



埼玉古墳群発掘調査報告書 第三集

愛宕山古墳

昭和六〇年三月一〇日 印刷
昭和六〇年三月三〇日 発行

編集 埼玉県立さきたま資料館
発行 埼玉県教育委員会
印刷 アサヒ印刷株式会社